

大阪大学大学院文学研究科  
外部評価報告書  
2018

ESSAIS  
SUR LA  
NOBLESSE  
DE FRANCE,

CONTENANS  
UNE DISSERTATION

Sur son origine & abaissement,

Par feu

M. le C. DE BOULLAINVILLIERS;

AVEC DES NOTES HISTORIQUES,  
Critiques & Politiques;

Un Projet de Dissertation sur les premiers  
François & leurs Colonies;

ET UN SUPPLEMENT AUX NOTES  
par forme de DICTIONNAIRE pour la Noblesse.

*Heu! fuimus Troës.*



A AMSTERDAM.

MDCCLXXII.

*de France.* 17

pour cela que l'Histoire de la première Race nous présente si souvent des Evêques maltraitez ou mêlez dans les troubles de l'Etat.

Voilà en abrégé la notion que l'on peut prendre des différentes fortunes & de la fin de la Noblesse Gauloise.

ORIGINE DES FRANCS  
ou FRANÇOIS.

*Condition de leurs Rois dès-lors.  
Comment successifs d'électifs qu'ils  
étoient d'abord.*

LES François étoient dans leur  
origine un peuple du Nord (7)  
étranger à l'égard des Gaulois & des  
B Ro-

(7) L'abondance des différentes choses qui se présentent à dire sur cette origine pour satisfaire aux promesses des Notes 3, 5 & 6, (ci-devant aux pages 12, 13 & 14) ayant excédé les bornes d'une Note, l'on a cru faire quelque chose de plus utile de former une Dissertation de l'assemblage de tout ce que l'on a tâché de savoir sur tous les premiers peuples

30 *Disserta*  
règles de la ve  
droits & avant  
tion a aquis &  
& la protectio  
principalement  
quête de la G

L I

*Premier état  
Juste idée*

Dans l'origin  
libres, tous pa  
pendans, soit  
culier. Il est  
qu'ils n'ont co  
tre les Romain  
qu'ils attaquoie  
te précieuse L  
comme le plus  
C'est ainsi que  
Auteurs en par  
tre dife.

Ils avoient o  
tablissement d'  
d'une nécessité  
Societez. Les  
ment connu la  
fement, aussi-

大阪大学大学院文学研究科

**外部評価報告書**  
**2018**

大阪大学大学院文学研究科  
評価・広報室

【表紙 ブーランヴィリエ伯著『フランス貴族試論—その起源と衰退についての考察—』  
(アムステルダム、1732 刊) より】

# 外部評価報告書 2018

## 目次

はじめに .....	1
------------	---

### 序 外部評価 2018（大阪大学大学院文学研究科の社会連携・社会貢献活動）

文学研究科における外部評価活動の経緯 .....	5
外部評価 2018 の概要 .....	5

### 第 1 部 外部評価書

国末憲人（朝日新聞『GLOBE』編集長 [外部評価委員会開催時]） .....	11
關雄二（国立民族学博物館教授 副館長） .....	15
武内紀子（株式会社コングレ 代表取締役社長） .....	19

### 第 2 部 外部評価委員会記録

委員会次第 .....	23
委員会記録 .....	24

あとがき .....	53
------------	----

### 附 録 外部評価資料

大阪大学大学院文学研究科の社会連携・社会貢献に関わる活動事例集



## はじめに

本研究科では、2004年の国立大学法人化の少し前から、みずからの教育研究の活動を顧みる「自己評価」とともに、外部有識者に依頼して客観的な観点から活動を点検していただく「外部評価」に着手し、今日までこの二つの方式の評価を独自に続けてきました。

法人化以降は、あらかじめ策定し承認を受けた「中期計画」「年度計画」に基づいて活動を計画的に進め、その達成状況について当局から点検を受ける方式が、公式には評価の中心になりました。ただ、それはどちらかというとな数値として明示できる内容に重点を置く傾向があり、活動のプロセスや数値で表せないような質的な側面については、やはり別途みずからの取り組みとして点検を行う必要があると考えています。

今回の外部評価では、はじめて「社会連携・社会貢献」という面に焦点を当てて、本研究科の諸活動を吟味していただくことにしました。

教育研究を本来的な使命と任じてきた大学が、社会とのかかわりを重視するようになったのは、右肩上がりの経済成長神話が崩れ去った20世紀末のことです。培われてきた学知を社会に還元することによって、大学自体も現代社会の課題に積極的に取り組み、未来を切り開く一員となるべきことが、強く意識されるようになりました。

制度的にも、2005年1月の中央教育審議会答申が、「教育」「研究」に加えて大学の第三の使命として「社会貢献」を掲げたのをうけて、翌2006年には、約60年ぶりに改正された教育基本法において大学の役割にかんする新条項が追加され、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と規定されました。大学という組織の活動が、キャンパスにおける教育、研究に専心していれば事足りた時代は過ぎ去りました。

この度の外部評価にあたってお力を貸していただいたのは、マスコミ、アカデミア、実業界の第一線で主導的な立場におられる三名の方々です。これまで何らかの形で本学との接点をお持ちのお三方であり、本研究科の社会貢献の外形的なあり方だけでなく、ホンネの部分にまで踏み込んで、忌憚ないご意見と示唆に富むご提言をいただきました。それらのご意見、ご提言は研究科内でしっかりと共有し、また今後の社会連携・社会貢献活動の道しるべとして、「人文知」を駆使した社会共創に活かしてゆく所存です。

最後になりましたが、お忙しい中、評価作業の労をおとり下さった外部委員のみなさまに心から感謝申し上げます。

2019年6月  
大阪大学大学院文学研究科長  
福永伸哉



# 序

## 外部評価 2018

(大阪大学大学院文学研究科の社会連携・社会貢献活動)



## 大阪大学文学研究科における外部評価活動の経緯

大阪大学文学研究科における初めての本格的な外部評価は、法人化以前の2002年度に実施された。専門分野ごとに、研究分野を同じくする学識経験者によってピア・レビューを行ったものである。

2004年度の法人化以降は、6年ごとの中期目標・中期計画に、定期的な外部評価の実施が盛り込まれることとなった。文学研究科における外部評価の実施主体となっているのは、法人化にともなって文学研究科の運営組織として設置された評価・広報室である。

2004～2009年度の第1期中期計画においては、2度の外部評価が行われた。第1回は、第2年度にあたる2005年度に行われたもので、3名の学識経験者を委員とした、組織全体に対する外部評価である。この回からは、『外部評価報告書』を刊行するとともに、文学研究科ウェブサイトと同冊子のPDFファイルを掲載し、広く社会一般の閲覧に供することとした。第2回は、第5年度にあたる2008年度に行われたもので、2002年度と同様、専門分野別に計24名の委員によるピア・レビューとして実施された。また新たに翌2009年度には、外部評価結果のフィードバックの一環として、『外部評価2008に答えて』を刊行し、同じくウェブサイト上でも公表した。

2010～2016年度の第2期中期計画においても、2度の外部評価が計画された。第1回は、第2年度にあたる2011年度に実施されたもので、2005年度と同様、3名の学識経験者を委員とした、組織全体に対する外部評価である。2012年度には評価結果に対するフィードバックとして『外部評価2011に答えて』を刊行している。第2回は、第6年度にあたる2016年度に行われた。この際は、大学が社会に有為な人材を送り出すことができているかという点への関心が高まっていることに鑑み、企業の人事担当部長を委員に委嘱し、①大阪大学文学部卒業生・大学院文学研究科修了生は教育目標を達成できているか、②大阪大学文学部・文学研究科の教育目標・教育成果は社会の要請に合致しているか、との二点に焦点を当てた外部評価を行った。その評価結果は『外部評価2015』に取り纏めの上刊行し、ウェブサイト上でも公表している。

### 外部評価2018の概要： 文学研究科の社会連携・社会貢献

以上のような経緯を受け、第3期中期計画における第1回目の外部評価は、各専門分野に対するピア・レビューとして行う案も検討した。しかし、2015年度の外部評価検討時の議論では、2002年度・2008年度に実施されたピア・レビューの対照・分析に基づき、大きな間隔を置くことなくピア・レビューを実施することによって新たに得られる情報はあまり多くないとの見解も示されていた。

他方、近年、大学の社会連携・社会貢献活動についての関心が大いに高まり、大阪大学では、「OUビジョン2021」のもと「知の協奏と共創」の理念を掲げ、大学と社会の連携に強い決意を示している。また、文学研究科においても、多様な人文知と産学官・市民社会

の人材が交差する「社会学共創」を推進している。

このような状況を踏まえ、評価・広報室では、研究科長および総務委員会との協議の結果、今回の外部評価は、文学研究科で現在取り組んでいる多様な社会連携・社会貢献の活動をテーマとして実施することを決定した。もとより、社会に対する大学の貢献の根幹にあるのは、何よりもまず、その教育と研究にある。しかしながら、一般に実社会との距離があると思われがちな文学研究科においても、多くの教員は、今日の社会の多様なニーズに対応しつつ、より具体的なかたちでの「社会連携・社会貢献」の活動を積極的に展開している。今回の外部評価は、まずはその全体像をわれわれ自身がつぶさに認識するとともに、その活動のあり方について、外部の有識者の率直なご意見とご評価を受けることを目標とした。

このため評価・広報室では文学研究科の全教員から情報を募り、まずは社会連携・社会貢献に関わりうる活動の事例を収集することから着手した。その情報を集成したのが、本報告書の巻末に附録として収録する「外部評価資料（大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献に関わる活動事例集）」である。これは、文学研究科を構成する文化表現論専攻・文化形態論専攻の6ブロック、および文化動態論専攻において、社会連携・社会貢献に関わる代表的な活動を選び、活動の概要と関連資料を編集・整理したものである。今日的な課題である「社会連携・社会貢献」の活動については、どこまでをその範疇に含めるのかなど、判断の難しい点もあったが、まずは外部に向けて広く情報を提示し、議論の材料とすることを目指した。

今回の外部評価は、この資料集を主な材料として、大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献の活動が、さまざまな領域において活躍される外部の有識者の目から見て評価に値するものなのか否か、その活動は十分か、また、その活動の今後にはどのような課題があるのか、などを広範にご議論いただくことになった。

今回、外部評価委員を委嘱したのは以下の3名の方々である（氏名五十音順）。

国末 憲人 氏（朝日新聞『GLOBE』編集長 [外部評価委員会開催時]）

關 雄二 氏（国立民族学博物館教授 副館長）

武内 紀子 氏（株式会社コングレ 代表取締役社長）

国末氏は、朝日新聞において論説委員などを歴任し、本評価時には朝日新聞『GLOBE』の編集長をお務めであった。著書に『ミシュラン 三つ星と世界戦略』（新潮新書）、『ユネスコ「無形文化遺産」』（平凡社）などがあり、新聞メディアでの経験に加え、文化・学術の面に関しても幅広いご見識をもたれる。

関氏は、国立民族学博物館（大学共同利用機関）の教授・副館長の職にあつて、学術研究と社会をつなぐ場での長い経験をもっておられる。また、ご専門の新大陸考古学の領域においては、発掘成果の社会還元にも取り組み、国際協力機構「地域振興のための観光開発」検討委員会委員（2003-2004）なども務められている。

武内氏は、コンベンション企画運営会社コングレの取締役社長として実業界において長くご活躍である。コンベンション企画という、学術領域と社会をつなぐ企画にも実務面から深く関わられる武内氏は、大学の社会的な責任についても高いご見識をおもちであり、文化審議会の第14期文化政策部会委員などを務められた経歴もある。

委員の方には2018年10月に、委嘱状および以下の資料をお送りした。

- 1) 外部評価資料（大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献に関わる活動事例集）
- 2) 年報2016（冊子、DVD）
- 3) 年報補足説明資料
- 4) 外部評価報告書2015

資料送付後、評価方法について、必要に応じてメール・電話等でのやり取りを行ったうえで、2018年12月18日に、3名の委員の方全員に文学研究科にお集まり頂き、外部評価委員会の全体会合を持った。普段よりご多忙の皆様であり、全員の委員にお集まり頂けたのは、この上ない僥倖であった。

会合では、まず外部評価の概略について改めて文学研究科側から委員の皆様にご説明したのち、委員の方々から個別に意見を頂戴し、その上で全体討議を行った。これらを踏まえて、各委員の方には後日、外部評価書をご提出いただいた。

本冊子は、第1部にその「外部評価書」を収録する。続いて第2部には、上記の全体討論の内容を書き起こした「外部評価委員会記録」を掲載した。巻末には附録として、「外部評価資料（大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献に関わる活動事例集）」を収める。この一冊において、現時点における大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献の活動の概要と、それに対する外部有識者のご見解が一望できる編集となっている。本冊子の刊行を通して、学内外の多くの方々からさらなるご意見・ご感想を頂戴し、今後の大阪大学文学研究科のこの分野における活動に資することができるならば誠に幸甚である。

（評価・広報室〔文責 室長 岡田 裕成〕）



# 第1部

## 外部評価書



# 国末 憲人

朝日新聞『GLOBE』編集長（外部評価委員会開催時）

## ■ はじめに

大学とメディアは、主たる目的こそ研究教育と報道言論の点で異なるものの、社会に果たす貢献の性格や影響面では重なる面が少なくない。本報告では、筆者の持つメディアの経験と視点から、大学による社会貢献・社会連携のあり方を考えたい。なお、筆者が編集長を務める『GLOBE』（外部評価委員会開催時）は国際問題を主なテーマとする朝日新聞の日曜版で、月1回発行する紙面だけでなく、国際情報ウェブサイト『GLOBE+』、テレビ朝日との提携番組、上智大学との提携講座、随時開催のトークイベントやシンポジウムの開催を通じて、実験メディアとしての多様な発信を目指している。

## ■ 大阪大学文学研究科の社会貢献・社会連携の現状について

大阪大学文学研究科の2018年度外部評価資料を概観すると、取り組みの頻度と多様性に圧倒される。特に、研究成果を応用した市民向けの講座の開催、学外の団体などが運営する活動への協力プロジェクト等が充実していると見受けた。典型的な例は「一般財団法人懐徳堂記念会と連携した社会貢献活動」で、中でも「春秋講座」は70年近く続く恒例のイベントとなっており、大阪という地元にかかわる研究成果を市民に還元しようとする試みとして定着しているように見える。学内外の交流を広げるうえでも、地元市民への研究の認知度を上げるうえでも、貢献度は大きい。

こうしたイベントの会場として、大阪の中心部にある中之島センターが活用されているのは、市民の利便性の面からも活動の認知度拡大の面からも評価できる。イベント多くの市民にとって大学キャンパスは依然としてハードルが高い存在であり、人々の生活や仕事の現場近くに出向く努力が、大学側には欠かせない。その拠点として中之島センターは有効であり、今後も利用価値が高い。このセンター以外にも、イベントの会場として学外の様々な施設が利用されているのは、好ましい傾向だと考える。

イベントは近年、メディアにとっても重要な広報とビジネスのツールとなっているが、会場確保がいつも悩ましいだけに、うらやましい環境にあるといえる。

社会や時代の要請に応じた取り組みも、充実しているように思われる。臨床哲学研究室による「哲学カフェ」は、医療介護現場での「看取り」の問題や尊厳死等の議論に新たな視点を与える試みであり、地道ながら参加者に対するインパクトは大きいだろう。市民団体と協力しながら開催している点でも大学と実社会との相互交流が広がる可能性があり、メディアに向けた広報効果も望める。同様の取り組みの一環として更に少人数を対象にした「ソクラティック・ダイアログ」は、参加者が限られているものの長い時間をかける

ことによって関係の深化や持続性が期待できる。

ネットの普及とグローバル化によって情報発信の範囲が急速に広がる一方で、近年は企業もメディアも、コアなユーザーやファンを開拓するために、少人数を対象としたイベントに力を入れる傾向が強まっている。私たち『GLOBE』も、2018年11月から若手ビジネスパーソンを対象にした30人規模のトークイベント兼交流会を開催し、参加者のネットワーク化を狙っている。大学はメディア以上に専門性が高いだけに、その研究内容や活動に敏感に反応する市井の専門家たちをしっかりと押さえたい。そのためにも、イベントや講座への参加者の情報や傾向を把握し、データベース化や会員組織化を模索したい。

その他にも、地域社会や学外専門家等と密接な関係を結びつつ継続的に進めている古墳群発掘調査にかかわる活動や、島根県隠岐の島町調査関連の活動、海外の大学にも影響を与えている「くずし字学習支援アプリ」開発、専門家養成に貢献している「記憶の劇場」など、印象深く話題性にも富んだ取り組みは少なくない。

総じて、地道ながら安定した試みであり、社会貢献と社会連携の使命を十分果たしていると受け止められる。大阪大学というブランドを定着させ、広めていくうえでも、有効だといえる。

#### ■ 社会貢献・社会連携拡大の可能性

一方で、外部評価資料からはやや見えづらい分野や側面もうかがえる。以下の点は、今後発展させる余地があると考えられる。

第1は、ウェブサイトに関する取り組みである。確かに、歴史教育研究会の取り組みでサイトへのリンクが高大連携歴史教育研究会の筆頭に掲載されたり、野中古墳発掘にかかわるホームページが開設されたりと、その一端は知ることができる。一方で、その主な目的は記録の面にあり、活動を広く知らしめる意識は薄いだらうと推測できる。

一般的に、近年はウェブとともにライブが重視される時代だといわれ、企業やメディアは両者の連携による広報戦略に取り組んでいる。ウェブで活動やブランドを広めると同時に、ライブによって直接消費者や市民と接することでコアなユーザーを獲得したり自らのコンセプトを固めたりするのである。多くの企業やメディアの場合、日々情報をアップデートできて拡散力も強いウェブを主戦場と設定し、これにイベントを加えることで戦略を組み立てている。『GLOBE』もウェブ戦略を展開すると同時に、2、3カ月に1度程度の間隔でトークイベントを開き、読者との接点確保を目指している。

一方、大阪大学大学院文学研究科の例を見る限り、ウェブとイベントの比重がこれらの例とは逆転しているように見える。中之島センターなどの施設を活用し、数多くのイベントを開催しているが、その頻度に対してウェブ発信の実態が明確には浮かび上がってこない。多くの企業がウェブの専門担当者を置き、情報を毎日更新してユーザーの利便を図り、検索で上位に掲載されるよう工夫を凝らし、またフェイスブックやツイッター、インスタグラムなどによるSNS発信もからめつつ浸透を図っていることを考えると、多少のアナログ感が漂っている。

こうした分野は、若い学生が得意とするところでもある。広く参加を募りつつ、活動を拡大すべきではないだろうか。

第2に、外部評価資料に掲載されている事例の多くが文学研究科単独の試みであり、外部との協力はあるものの、学内学部間の協力によるプロジェクトがあまりうかがえない点も、模索の余地があると考え。学部間の事業や学際的な研究の立ち上げ、推進には、予算面など様々な障害があると推測できるものの、もう少し共同企画の取り組みがあつていい。市民にとって、大学は学部や研究科ごとの単位で認識されることは少なく、大学単位でブランドとして定着している。研究科単位の社会貢献や社会連携の状況は、大学単位の貢献や連携のあり方と切り離すことが難しい。特に、文学研究科は独特の時間軸や社会との距離感を保っているだけに、より社会に近いところで活動している研究科や学部との協働は、相互刺激を生み出すことになり、社会にとっても有益だろう。何より、異なる分野の知見や蓄積がごく身近にある環境を利用しないのは、いかにももったいない。

第3に、外部評価資料に集められた事例には、やや寄せ集め感が拭えない点も指摘したい。取り組みには多様性がうかがえる一方で、それぞれの重要性の判断、貢献の対象とする社会の特定や分析、優先度の軽重、社会貢献・社会連携の戦略全体の中での位置づけは、必ずしも明確には浮かび上がっていない。全体を整理し、検討し、場合によっては戦略上の格付けを施す必要も生じるだろう。もちろん、これは研究の意義や成果の格付けではなく、社会貢献・社会連携事業としての格付けである。

#### ■ 想定できる今後の取り組み

以上の点を踏まえ、今後の取り組みについて考えたい。

大阪大学文学研究科のこれまでの事業を見ると、特定のテーマや分野に関心を持つ人を対象としたものが主流となっていると見受けられる。これは決して、マイナスではない。こうした企画への参加者は上に記した通り大阪大学ブランドのコアなファンである可能性が高く、取り組み自体が研究科のアイデンティティー形成にもつながる可能性があり、今後も大切にしていける必要がある。

一方で、もっと広い層あるいは不特定多数に対するアプローチも、同時に拡充していくべきだろう。従来のイベントを新聞やテレビなどの報道を通じて拡散させるのは一つの手法であるが、その時の状況や接する担当者に大きく左右されるだけに、過度の期待は禁物である。あくまで独自の企画と方法を模索するべきで、ウェブの拡充はその一つの手段だといえる。また、今回の外部評価資料にはあまり含まれていないが、研究者にとってはごく一般的な営みとなっている出版を通じての社会貢献は、さらに積極的に宣伝広報をする余地がある。

従来充実している市民団体や行政との共同作業に加え、企業やメディアとの協力の道も拡大を狙いたい。もちろん、文学研究科であるだけに理科系や社会科学系のように時事的な関心に直結するプロジェクトは難しいかも知れないが、観光など文学研究科と親和性の強い分野も少なくないと考えられる。

これらの社会貢献・社会貢献を進めるうえで、大阪大学また大阪大学大学院文学研究科に対して、社会が何を望み、何を欲しているか、探る工夫も欠かせない。すでにそのような工夫は進められていると認識しているが、活動の多くが社会的要請に基づくというより、研究者のテーマや活動に沿って企画されているのも現実である。もちろん、研究教育機関としての大学のあり方から見るとこのようなアプローチは当然であり、妙に世間を気にして迎合する必要は全くないが、一方で社会側の意識を無視した貢献や連携もあり得ない。

「社会貢献・社会連携」と銘打つ以上、社会が何を求めているかには敏感でありたい。その取り組みは、研究成果の報告や啓蒙活動とは異なる意識に基づく必要があるだろう。

これらの取り組みを進める上でも、社会貢献・社会連携活動の目標とそこに至る大筋を示す大局的な戦略プランを策定すべきではないだろうか。多種多様な活動の全体像を把握して整理するうえでも、その中から強調する点を見いだすうえでも、こうした指針は不可欠だと思われる。

企業やメディアでは、全体の方向性を定める指針を策定したうえで具体的なプロジェクトを議論するケースが多い。こうしたアプローチは、個々のプロジェクトのぶれを防ぐうえでも有効であり、社会とのつながりを深める手段として検討に値すると考える。もちろん、こうした営みが、研究教育機関である大学に欠かせない「自由」を縛る危険性には、十分留意すべきだろう。

## ■ 終わりに

大学はある意味で世間から孤高であることにその意義を持っており、安易に世情に流されると、その魅力が衰えるだけでなく、問題でもある。グローバル化、ポピュリズム全盛の時代だけに、大学が独立を保つことには大きな意味があり、その点で、ある意味の「浮世離れ」「常識外れ」といわれる態度は、大学にはむしろ不可欠だといえる。そのような特性を逆に活かしつつ、流されやすい世情世論に果敢にもの申す姿勢こそ、大学、特に長期的視点で物事をとらえがちな文学研究科に求められるのではないだろうか。

社会と時代の流れに敏感でありつつ、かつその流れに迎合しない社会貢献・社会連携活動を、大阪大学大学院文学研究科に期待したい。

# 關 雄二

国立民族学博物館教授 副館長

## 1. はじめに

今回の外部評価は、大阪大学文学研究科の社会連携・社会貢献事業を対象としたものであったが、非常に多くの社会連携・社会貢献活動を多忙な教育、行政の合間を縫って行っている、というのが第一印象であった。昨今の大学教員の業務の繁忙さを鑑みたとき、十分過ぎる活動と評価できる。その点を基本認識とした上で、いくつかの疑問点、また修正することでより効率性や評価が高まると考えられる点などを指摘したい。なお論点は、全体にわたる点から、個々の活動の順に絞っていく。おもに評価対象の活動内容と言うよりも外形的な面に力点を置くことをお許し願いたい。

## 2. 評価の対象

資料に目を通して、第一に評価者が感じた問いは、(1) ブロック毎のプロジェクト、プログラムがどこで、どのように決まったのか、(2) 年度計画があるのか、(3) 資金がどこからでているのか、といった点であった。また(4) この外部評価が、文学研究科に対するものという位置づけがなされいながら、参考とする資料は、個別の教員の活動を束ねたもののように見える点も気になった。

とくに最後の点については、人文科学が、各個人の発想に基づく個別性の強い分野であることは認めたとしても、このままの形では、外部評価が各個人の社会連携・社会貢献活動への評価に受けとられてしまう可能性がある。もちろん、このままでよしという考え方もあろうが、仮に教員個人の評価とされてしまうならば、当然のことながら、研究業績同様に、教員全員の社会連携・社会貢献活動に関する報告がなされた上で、評価をすることになろう。評価者個人としては、社会連携や社会貢献分野では、活動の濃淡が顕在化するような方法は避けるべきかと考える。

### 2-1. 機関としてのとりまとめ

ならばどうするのか。最も簡単な方法は、研究科として活動をオーソライズすることである。研究科全体として、年度毎の活動計画を立案する際に、各ブロックより提案を集め(プロジェクト名、概要、実施形態、日時、資金など)、計画書の中にまとめ、研究科で共有することを提案したい。一部のブロックでは、年度始めにプロジェクトを議論の場にあげているという説明も、外部評価委員会で大学側委員からなされたが、制度化されているようには見えない。

また年度末には、実施報告書(ごく簡単な内容と資料)を研究科としてまとめておけば、

単なる個人の活動から研究科の活動として昇華させることが可能になる。年度途中で新規案件についても、柔軟に対応すれば良い。またシリーズものについては、年度当初に全体計画を出すことで済ませる方法も考えられる。こうした書類を外部評価委員会の資料としてつけておけば、疑問をぬぐうことができる。書類が増える、などの不満が教員から出ることは十分に予想されるが、そもそも評価などを実施することを決定した時点で、この程度の点は覚悟しておく必要がある。

## 2-2. 名義使用の推奨

もう一点、文学研究科としての活動に昇華させる方法が、名義付与である。評価用の資料に目を通した限りでは、文学研究科のみならず、大阪大学との関係性すら判断できない活動が散見された。教員個人の発意によるボランティア活動と区別できないと指摘されても仕方あるまい。こうした資料を吟味した上で、評価資料から外すという方法も考えられるが、むしろ有効に活用していく方向が望まれよう。そのためにも、教員の社会連携、社会貢献活動においては、文学研究科、もしくは大学の名を共催、協力、協賛機関として積極的に付与、提供、申請していくべきと考える。大学側が付与する名義使用にあたっては、煩雑な手続きを避けるため、一定のフォーマットを用意し、実施者がそこに簡単な事項に記入し、チラシ等資料があればそれとともに届けるだけで許可する簡易な仕組みを作ればよいと考える。

## 2-3. 機関評価と社会状況

なお評価者の所属機関では、機関が主催、共催、協力する企画のみを機関の研究あるいは社会連携活動と位置づけ、委員会の議題とし、評価の対象としている。そのため、機関の名義がなく、各個人が館外で関わる社会連携・社会貢献活動については、機関管理の個人データベースに掲載し、また機関管理のウェブ・サイトに掲載することは個人の自由であるが、外部評価、もしくは人事などの評価対象にはならない。

これは、機関運営における最高決定機関である運営会議（大学で言えば経営評議会にあたる。外部委員が半数）でも認められている。昨今の大学では、業務重視の中で、業務以外の学外活動（とくに謝金が発生する場合は抑制される傾向にあり、こうした学外業務をもって教員に高い評価を与えることはできない、という論理である。

この点は、評価者が所属する機関を監査する外部委員からも寄せられており、しばしば、兼業届けの管理が行われているのか、出張扱いにはしていないか（業務ではないので出張ではない）、さらには、最近では、機関外の出版物の原稿は業務時間内に書いているのか、もしそうならば発生する稿料や印税は機関に収めるべきではないのか、といった信じがたい指摘もなされる。こうした評価と管理が強化される状況下で、教員各自の自主的、かつ意義の高い社会連携・社会貢献活動が停滞しては意味がなかろう。そのためにも、最小限の努力で、評価に応える必要があると考える。

### 3. ブロック毎の評価

以上の観点から、各ブロックの活動について、若干のコメントを述べる。

#### (1) 懐徳堂

大変アクティブな活動が展開されている。ただし、資料を見ただけでは、記念会、大阪大学懐徳堂研究センター、研究科、大阪大学 21 世紀懐徳堂という組織間の関係性が理解しにくい。場合によっては、協定を結ぶことを考えてもよいのかもしれない。

#### (2) 哲学対話の活動

大変アクティブな活動が展開されている。ソクラテック・ダイアログにおいて、一部大阪大学の組織名が載っていないものが見られる。学外の主催者に個人的に協力しているだけと受け取られかねない。

#### (3) 大阪大学歴史教育研究会

大変アクティブな活動が展開されている。すばらしい活動が、この組織と大阪大学との関係が今ひとつわかりにくい。学内研究なのか。会の活動が大阪大学の Web に載っているようだが、サーバーの利用許諾、会の運営資金などがわかる資料があるとよい。

#### (4) 百舌鳥・古墳群

大変アクティブな活動が展開されている。映像の一般公開や英文ページの存在など、特筆すべきである。大学研究科の名前も出ており、高く評価できる。

#### (5) くずし字学習支援

国文学資料館や国際古典籍クラスターの研究として開発されたものであり、学会との連携も明確である。大変すばらしいプロジェクトであるが、社会連携というよりも研究成果としての性格が強い。高く評価できる。

#### (6) 関西チェコ・スロバキア協会との連携

教員が中心となって発足した組織ではあるが、大阪大学との関係が不明確である。外部団体への協力を社会連携と呼ぶためには、なんらかの手続きが必要であろう。

#### (7) 記憶の劇場

大変アクティブな活動を展開しており、注目すべき業績の一つであろう。ただし、文化庁の助成事業と記されているが、受け皿が研究科なのか博物館なのかがわかりにくい。イベントの名義を含め、整備することが望ましい。

#### (8) 芸術系教員による美術展、音楽・演劇公演についての企画・開発協力

教員個人の学外団体への協力活動のように見える。主体が外部にある場合、大学の関与を示さないかぎり、業務外の活動と見なされるおそれがある。

#### (9) 島根県隠岐の島調査

活動内容はすぐれており、地域の活性化とつながる重要な活動である。社会連携自体を研究方法として取り込み、学生の参加を実現している点で、高く評価できる。ただし、このプロジェクトだけ取り上げているというのは、他の科研費プロジェクトには、社会連携や社会還元がないということにならないのかがやや心配である。

### 4. 評価資料の改善点

まず、評価資料に記された文言のうちで、「ブロック」の意味が外部評価委員にはわかりづらい。大学内部の特殊な仕組みや組織運営に関しては、わかりやすい説明資料を用意しておくことが望ましい。予算の有無についての情報も抜けていた。

また評価資料は、実施母体側の発信に関する資料が多かったように思われる。現在の評価は、実施したことに対する社会的反響、効果が問われると考えられる。その意味で、百舌鳥・古墳群ブロックなどで添えられているように、結果に関する記事、Web上でのコメントなどを集めておく必要がある。2-1で述べた年次報告書に添付を義務づければ、手間が省ける。

## 5. 評価体制の改善点

一般に外部評価委員会では、関係者は陪席者とする場合が多い。大阪大学の場合は、教員を委員としているようだが、これでは外部評価の意義が減じられる可能性が高い。教員は陪席者、説明者に徹する方が、外部評価にはふさわしいのではないだろうか。なお、評価者の所属機関では、外部評価委員会の委員は、議長を含め、全員外部機関の方にお願いしている。

## 6. その他

外部評価委員会の席上で、紹介された高校や自治体教育委員会との連携活動は、大学が行うべき社会連携、社会貢献活動として大変重要であると感じた。これが大阪大学歴史教育研究会の活動の一貫であるのかどうか記憶が曖昧だが、自治体との連携は、他の国立大学も進めており、検討課題と言えよう。

今後、大阪では、2025年に万博が開催され、また世界全体は、SDGsで掲げられたゴールと目標に向かって動いていくものと思われる。これらは、大学全体として取り組む課題とは思われるが、文学研究科自体が率先して、世界の流れの中での人文系の位置づけを示し、それに沿った形で社会連携・社会貢献を推進していくことが望まれる。

以上、簡単ではあるが、外部評価委員としての意見を提示した。今後も大阪大学文学研究科の社会連携、社会貢献活動が益々発展していくことを強く期待するものである。

# 武内 紀子

株式会社コングレ 代表取締役社長

「文学」という言葉は、私にとってはどちらかというと外部への発信よりも、内面に深く入り込むイメージが先行する。取り組まれる方々の志向も、元々はその方が強いのかもしれない。また、世俗的な「社会」のイメージよりも、難しくて崇高な感じがして、私などには敷居が高く、やや敬遠し距離を置きがちになる。

そうした印象の中であって、今回大阪大学文学研究科のいくつかの取り組み資料を拝見できたこと、また外部評価のテーマとして「社会貢献、社会連携」が取り上げられるのを知ることができたこと自体が、自分自身の収穫であった。

ここで紹介された事例から、研究を発信する手法や機会を、一般の人により届きやすいものにと考えることによって、社会とのつながりをさらに意識することになるのに加え、そのことが新たな気づきや成果を生む機会を増やすのではないかと感じる。

自由な学風を誇りとし独創的な学問と思想を展開する懐徳堂の精神は、適塾のそれと合わせて、「阪大らしさ」ともいえる我々の拠り所として非常に重要である。

これは社会連携を考える場合のシンボルやメタファーとしても、直接間接に活用できる。懐徳堂記念会と連携した社会貢献活動に限らず、各種の研究会の活動や対話がこれに通ずるものと思われた。

生涯学習への取り組みは、高齢社会への対応として非常に重要なテーマである。文学研究科の研究分野は、人々にとって教養の一環としても大きなポジションを占める。百舌鳥・古市古墳群に関わる活動は、世界遺産指定に向けた動きを兼ね、生涯学習のコンテンツ提供だけでなく、人々の地元への関心を育て、研究とつなぐ役割を果たしている。また、生涯学習としての側面だけでなく、「くずし字学習支援アプリ KuLA」のようなアプリケーション開発や SNS 発信を研究と組み合わせることで、新たな人々を巻き込み、それぞれのコラボレーションやビジネスの輪を広げる可能性が拡大する。今後さらに、ICT やコミュニケーション手法の進化を取り入れ、「社会貢献・社会連携」を視野におくことで、ビジネスや社会問題解決、リスクとの対峙、グローバル化と歴史の関係性を見出すことなど、より開かれた研究の進展がはかれるのではないかと。

文化芸術関係の活動が、時に興業的な思考も取り入れて実践されること、またそれを担う人材を育成し試行する場を経験させることなどは、今後の文化芸術活動の持続可能な発

展に向けて、ぜひとも取り組んでほしいと考える。その意味で、「記憶の劇場」の活動や美術展、音楽・演劇公演等への関与などは、たいへん心強い。

文学部の卒業生や文学研究者から、文化活動をビジネス化できる人材や社会起業家が数多く輩出されれば多様性がさらに広がるし、異質と言われる日本文化の豊かさは、今後の「縮む日本」において、海外に向けての大きな武器になりうる。ぜひその担い手がこうした活動から生まれることを期待する。

こちらも、発信や連携の方法として、書籍や劇場、博物館など従来型の「場」とどまらず、SNS、様々な形のアート、イベントなど、一層この動きが広がればと思う。

さらに、これらの文化研究科の研究活動が、個々に「社会貢献・社会連携」を意識して動いていることの意味も大きいですが、その他を含むすべての研究において、研究を研究として深く極めることとは別に（「別」ではないのかもしれないが）、常にそれに関わる学生に対し彼らの人間としての形成・成長期に、研究を社会につなげて考える機会を意図的に作ってもらいたい。

その思考が研究に広がりをもたせるような気がするのと同時に、社会に出てからの逆の発想や新たな視点につながったり、仕事のやりがいにも通じていくように思う。

「社会貢献・社会連携」は、大学の研究のみならず、教育現場として、学生にその意識を育むことも含まれるものと考えます。そしてその意味は甚大とも言える。

大阪大学文学研究科の「社会貢献、社会連携」として、今後さらに求められるもの考える。個々の研究でなされるものとは別に、また、政府方針からくる社会連携とは一味違った阪大としての社会貢献・社会連携の姿があれば望ましい。

先に触れた、懐徳堂、適塾につながる自由な考え方の伝統。大阪・関西の特色と言われるチャレンジ精神とオープンマインド。上方文化や商人気質。大都市であり地方でもある両方の側面からアプローチできるエリア特性など、阪大だからこそできることは少なくない。

大阪大学が「産学共創」を掲げる中、個々の研究とは別に、もしくは個々の研究からアプローチする文学研究科としての貢献・連携テーマを掲げてはどうか。例えば、SDGsから阪大文学研究科として関心を寄せる項目をあげ、各学科がそれぞれ違う方向からアプローチを試みることも、意外な共創が生まれる可能性があるのではないかと。

2025年の大阪万博の開催も決まり、そのテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」である。「大学」はその存在だけで、地域におけるある種の重要なポジションを占める。

「文学」という専攻の「強み」を活かして、また変化する「社会」から養分を吸い取って、新たな研究が育つことを期待し、万博についても、イベントの中だけに限らない、未来社会に対し科学技術のみならず文化芸術からもその意味を定義し、社会に働きかける役割を担っていただくよう期待する。

## 第2部

# 外部評価委員会記録



# 外部評価委員会記録

日時：2018年12月18日 14:30～17:15

場所：文法経本館4階・名誉教授室

出席者：

外部評価委員（氏名五十音順）

国末 憲人（朝日新聞『GLOBE』編集長 [外部評価委員会開催時]）

關 雄二（国立民族学博物館教授 副館長）

武内 紀子（株式会社コングレ 代表取締役社長）

大阪文学研究科

福永 伸哉（教授 文学研究科長）

岡田 裕成（教授 評価・広報室長）

高橋 照彦（教授 評価・広報室副室長）

文学研究科参考委員

永田 靖（教授 副学長 社会学共創本部長 大阪大学総合学術博物館館長）

陪席者

寺田 憲司（事務長）

片桐 良実（庶務係長）

倉智 聖子（評価・広報室事務補佐員）

## 委員会次第

1. 研究科長あいさつ 福永伸哉研究科長
2. 外部評価2018の趣旨説明 岡田評価・広報室長
3. 外部評価委員からの意見 外部評価委員3名
4. 全体討議

## 委員会記録

【進行（岡田）】 2018年度の外部評価委員会を開催させていただきます。まず、福永研究科長より冒頭のごあいさつをいただけますでしょうか。

【福永】 失礼します。研究科長の福永でございます。きょうは年も押し詰まって大変お忙しい中、武内様、關様、国末様、わざわざ本学までご足労いただき、この外部評価にご協力いただきまして、誠にありがとうございます。まずもって御礼申し上げます。

かつて大学は好きなことを、好きなスタイルでやっていればよかった時代もありましたが、いまや教育、研究、社会貢献それぞれに方向性を明示して、目標を立てて、それに向かって進んでいくというスタイルになりました。常にその目標に向かってきちんと進んでいっているか、あるいは目標の設定自体が不適切ではないかということも外部の有識者の先生方にいろいろご意見を伺い、点検をしていただきながら、諸活動を進めていくというふうになりました。とりわけ、国立大学が法人化して以降、きちんと外部の先生方のご意見を聞いて、私どもも自分たちの活動を顧みながら、少しでも良くしていこうという方向へシフトしてきております。

文学研究科ではこれまで主に、法人化前後以降ですけれども、外部評価を何回か行いました。これまでは研究の評価、教育の評価を中心に、3年に1回こういう形での外部の先生をお招きしていろいろ点検、ご意見をいただくということにしておりまして、前回2015年には、人材育成という教育面での評価を外部の先生にお願いしたところです。今回は、社会連携あるいは社会貢献という形での文学研究科の取り組み、方向性、目標設定、実績などが適切といえるかどうかというところを厳しく吟味していただき、いろいろなアドバイスあるいは示唆をいただきたく存じます。それをフィードバックし、少しでもこの研究科の教育・研究と社会連携が意義を持ってスムーズに進むように心掛けたいと思いますので、きょうは短い時間ですが、どうか忌憚のないご意見をよろしく願います。

【進行】 どうもありがとうございました。本日は外部評価委員として、(五十音順にて) 国末憲人様（朝日新聞『GLOBE』編集長 [外部評価委員会開催時]）、關雄二様（国立民族学博物館教授、副館長）、武内紀子様（(株) コングレ 代表取締役社長）のお三方をお迎えしました。文学研究科からは、福永伸哉（教授、文学研究科長）、岡田裕成（教授、評価・広報室長）、高橋照彦（教授、評価・広報室副室長）の3名、そして参考委員として、社会学共創担当の副学長を務める文学研究科教授・永田靖が出席しております。事務部よりは、寺田憲司事務長、片桐良実庶務係長、倉智聖子評価・広報室事務補佐員が陪席します。会議の進行は、わたくし、評価・広報室長の岡田が務めてまいります。よろしくお願いいたします。

さて本日の趣旨ですが、研究科長からの挨拶にもありました通り、「社会貢献」「社会連携」という観点につきまして、外部の目から、大阪大学文学研究科の活動をご評価いただくということにあります。

文学研究科の社会貢献、社会連携の基本はまずもって、その研究・教育にあると考えております。しかし近年においては、より具体的で目に見えるかたちでの社会貢献が大学に求められていることも承知しております。文学研究科の年度計画（平成30年度）においても「人文学的知の普及に努めるべく、大阪大学21世紀懐徳堂、適塾記念会、懐徳堂記念会、COデザインセンター、総合学術博物館、朝日カルチャーセンターなどと連携し、各種の市民向け公開講座、セミナーなどを積極的に開催する」との目標を掲げております。

外部評価委員の皆さまには、あらかじめこの分野における大阪大学文学研究科の主な活動をまとめた冊子を中心に、ご参考資料をお送りしておりました。本日は、それらをご覧になった上での質疑と議論をおこない、その上で、外部評価委員各位におかれては、最終的な評価書の作成をお願いしたいと存じております。

本日の構成ですが、前半では、お送りした資料（\*巻末資料編参照）を補うかたちで当方よりいまいし補足の説明を申し上げ、まずは各委員より個別にご質問やご意見をお受けしたいと存じます。休憩を挟んでの後半部では、自由討議のかたちで様々なご指摘をいただければと存じています。

ではこの前半の補足説明として、大阪大学全体の中での文学研究科の社会貢献・社会連携活動の位置づけなどについて、本日参考委員として出席いただきました社学共創担当の副学長・永田靖文学研究科教授より、補足の情報提供を申し上げたいと思います。永田先生、よろしく願いいたします。

【永田】 失礼いたします。別件がございまして、会議の前半で退出をさせていただきますことをどうぞお許し下さい。

それでは、大阪大学の現在の社学共創のあり方、大学の中で文学研究科の社学共創の活動がどういうふうに見られているのかということ、ごく簡単にお話ししたいと思います。

大阪大学は産学連携という理系の企業との連携というのが非常に強みになっていまして、私たちのところとはもう全く規模の違う額の寄付金や共同研究の基金がずっと入っているところなんですけれども、人文社会系の社学の共創の伝統も大阪大学は非常に強うございまして、懐徳堂は1724年、適塾は緒方洪庵が1838年につくった私塾、蘭学塾でございますけれども、北区にあります適塾を大阪大学に寄贈されるという形で大阪大学が管理維持している関係で記念会もありますし、センターをつくりまして顕彰と社学連携活動しているところなんです。

この2つを大阪大学の源流と見なしておりまして、大阪大学の大学としてのあり方を、社会の中で活躍していく、社会の中の要請に応じた研究教育をしていく大学だ、という

ふうには私たち自身は考えています。

その関係で、人文系のこの種の社会学共創活動も戦後からアクセラが踏まれ始めまして、適塾の記念会も戦後すぐできますし、懐徳堂も記念会もできるということで、今日に至っているわけです。

今、大阪大学といたしましては、ちょうど私が担当しております社会学共創本部というのができまして、大阪大学総合学術博物館と、適塾の記念センターと、21世紀懐徳堂という社会学連携活動をするセクションをつくりました、そして大阪大学アーカイブスの4組織を1つにまとめたセクションをつくったんですね。理系を中心とした産学連携活動はもう「産学連携本部」という巨大なものがありまして、それに拮抗するような形で、主に人社系の社会学共創活動を展開する組織をつくっているわけです。

その中でももちろん理系の先生方も地域連携的な、社会学連携的な活動をされるわけですが、ここでは、文学研究科の先生方が兼任教員という形で数多く参画してくださって、社会学連携活動の中での文学研究科の活動や、先生方のお仕事というのは、やはり存在感がごさいます。

大学といたしましては、教育基本法にさだめられておりますように、大学のミッションとして「研究」と「教育」と「社会貢献」がごさいます。その3つの仕事が大学の教員はやっていかないといけないということで、研究、教育は、皆さん積極的に自発的にされるんですけども、社会貢献については忘れがちというか、あまり念頭にない先生方が多いので、大学としてはこういう形で社会学共創本部というセクションをつくって、大学の先生方に社会学共創活動、社会学連携活動をしていただくような後押しをしているところです。

本部ができまして、方針も少し変えておりまして、今「社会学共創本部」という名前にしたんですね。それまでは「社会学連携」という名前ですけれども、いわゆる大学から社会一般、市民・社会に向けた一方向的な社会学連携活動、例えばレクチャーするとか、公開講座をするとかいうような一方方向の連携活動ではなくて、もちろんそれも大事で、それもするんですけども、これからは地域社会や市民社会の課題を取り入れながら、市民と地域との関係の中で、いったい市民が何を求めているのか、地域がどういう課題があるのかということ踏まえた上で、私たち大学人がそういう課題に対して応えていくという、そういう形の共創関係をつくろうとしているわけです。

そういうことありまして社会学共創本部というのが、これは去年の8月にできたばかりなんですけれども、これからの大学のあり方をもう少し社会の中により実体的に取り入れていこうという活動をしているところです。

文学研究科全体でみれば、全学で取りまとめている年度計画と年度報告の中に各部署の社会学連携活動の具体例を挙げていくのですが、ほかの部署に比べると決定的に文学研究科の社会学連携活動の総数が多いということがありまして、非常に喜んでいるところです。

一つうれしいことがありましたのは、昨年の『日経グローバル』という雑誌があるんですけども、その中で日本の国公私立すべての大学の地域貢献度ランキングというのがありまして、そこで大阪大学が全国1位になりました。これは2年に一度のデータを集めているものですので、それ以降のデータは今まさに集めているところですけども、大阪大学が地域貢献度では全国の大学の中で1位になったので、文学研究科もその成果に多大に貢献しているだろうと考えていいのではないかと思います。

私、芸術系のブロックにおりまして、先ほどご紹介もいただきましたけれども、「記憶の劇場」というプログラムをずっとしております。文学研究科のこの社会学連携活動は大学の中でも覚えめでたくしてもらっておりまして、その中の1つの芸術ブロックの仕事の中の1つに、ここ3年間、この「記憶の劇場」というのをやっていました。

これは私が大阪大学総合学術博物館を担当することになりましたので、博物館を中心にといいますか、博物館の資料を扱ったプログラムをしようじゃないかという話になりまして、この3年間は博物館を主催としていったんですけども、その前の3年間は文学研究科でやはり別の、同じ文化庁の大学を活用する文化芸術推進事業を3年間しておりました。ですので、今年度で6年目になりまして、みんなもそれぞれやり方も覚えてきましたし、かなりの数のセミナーを1年間ですることになりまして、7つほどのアート系のプロジェクトを年間それぞれの先生方が進めていくわけなんですけれども。

そんなことで芸術系の活動に少し力を入れてもらっておりまして、中之島センターという、昔、医学部があった所ですが、今そこに10階建てのセンターが建っているんですが、その改修を2021年の大阪大学の90周年に始めようということで寄付を始めたところです。その改修案の中に、そのセンターの2フロア分をこの文学研究科の芸術系のスペースにするということで話が進んでいて、中之島センターの改修というのは、まさに社会学共創的なセンターにするということを念頭に置いて考えられているところで芸術の社会学共創的な研究教育の推進拠点になればいいと思っております。

そんなことで大学の中でも文学研究科の仕事というのは、それなりにと言いますか、評価されているのではないかなと私の立場からも思います。

細かい点は、あといろんな質疑でと思いますので、ひとまずここで。

**【進行】** ありがとうございます。駆け足でいろいろとご説明させていただきました。

ここからは、外部評価委員の皆様方からご質問、あるいは全体的なコメントをいただきたいと思えます。五十音順ということで、まずは国末様からお願いいたします。

**【国末】** 私はいつも、自分が勤める新聞社との比較で物事を考えてしまうのですが、大学と新聞社はある意味で似ているところが少なくないと思えます。新聞社も、ある種の教育研究機能を若干持っています。また、「社会貢献」と言う言葉とは少し異なりますが、アウトプット、あるいは「外に向けて発信する」機能もあります。新聞社の場合、むしろそれが中心的な役割であり、そこでお金ももうけているわけですが。

そのように考えていくと、ざっと資料を拝見して、大学の場合はいわゆるイベント系、ライブ系の社会に対する働き掛けがかなり多いと見受けられます。それが、比重の相当部分を占めていると思えます。新聞社の場合も、もちろんイベントを実施していきまして、展覧会とかも開催していますけれども、通常メインの業務というのは紙による発信です。新聞の売れ行き自体が最近難しくなり、だんだん部数が落ちてきていますので、「ではWEBでいこう」とか模索するわけなのです。

つまり、いわば発想が反対なのです。おそらく目指すところは新聞社も大学もそんなに違わないと思いますけれども、新聞社の場合、まず紙で発信して、その次にWEBで発信して、それでイベントをやろうという順番です。私が所属する日曜版『GLOBE』も、多方面のアウトプットを企画していますが、「イベント開催」はやはり最後に来るものですね。最近WEBが若い人にウケがいいので、そこは力を入れていく、しかしどうもWEBだけでは駄目なので、ライブで実際に会って顔が見えるようにして、WEBとの連携で…と。WEBだとなかなか相手が見えないし、匿名でのやりとりが多いものですから、そうではなくて、実際どういう人がそれを見ているのか、どういう人が関心を持っているのかというのを私たちも知りたいわけです。だから、ライブでイベントを開いて、そこで話をして、来る人を見てこちらも感じる。そういうことかと思うのですね。

なので、何が言いたいかという、全体の中でイベントが目立つのですが、WEBによる発信はどういうふうになっているのかな、とうかがいたいのです。

あと、ざっとした内容では、予算がどういうふうな形で回っているのか、というお尋ねがあります。私ども『GLOBE』のイベント予算はすごく少なくて、3回くらい何か小さい催しをしたら尽きてしまうのですが、そこで大学と一緒に開催するなどの工夫をしています。阪大の場合、中之島センターがあって、資料を拝見したら結構活用されていて、「これ、すごくいいな」と思います。今度貸していただけないかなと思ったりするのですが、中之島センターの活用も含めて、予算はどういう配分でどういうふうに戻っているのかなと思います。

**【進行】** 私が一番適任かどうか分かりませんが、概略をお答えさせていただきます。

まず、イベント、ライブ系が多いというご指摘ですが、そのとおりだと思います。ただ、紙媒体がないかという、本来、文学部は紙媒体だらけです。むしろ「文学部の教員は本だけ書いていけばいいのか」というところからたぶん出発して、社会貢献ということになると、おそらくイベント的なものが多い、ということにもなっているのだと思います。

ただ、紙媒体と密接にリンクしたものもあります。歴史学教育研究会などいくつかのプロジェクトは、印刷物等も盛んに発行されています。また、考古学研究室の活動も研究論文の発信をベースとして、その上でこの貢献活動ということなのだと思います。

そういう点で、イベント、ライブ系というのは、我々にとって、より新しいチャレンジなのだと思います。

「WEBを通しての活動はどうなっているんでしょうか」ということなんですけれども、大学の社会に対する情報発信としてこの領域というのは、まだまだこれから取り組むべきことが多い領域かと思います。ただ、文学研究科のホームページというのは一応ありまして、社会貢献活動の情報発信も行っています。また、研究室単位あるいはプロジェクト単位で、その活動を発信されているところもあります。例えば「記憶の劇場」のプロジェクトは、クオリティの高いWEBサイトをお持ちですし、島根県隠岐の活動も、人文地理学研究室のホームページの中で継続的に紹介されています。歴史学研究会や哲学カフェの活動も、WEB上での情報発信が行われています。

しかしご指摘を踏まえると、ウェブによる情報発信が、どこまで戦略的に行われているかについては点検してみる必要があるだろうと思います。

最後に予算のことですが、今回資料でご紹介したプロジェクトについては、文化庁の助成金や科学研究費などの外部資金をベースにしたものが多く含まれています。また、ものによっては、かなり手弁当的なものもあると思います。

いかがでしょうか。補っていただくところがもしありましたら。全学では、社会学共創本部などで指導して予算化したものなどもあるのでしょうか。

【永田】 その関連の部署のところに予算が落ちていて、その部署で、つまり社会学共創本部とかあるいは総合学術博物館とかで主催するその種のイベントについては、そちらのほうの予算で賄いますので、そこから場合によっては先生方に謝礼が出るということももちろんあるんですけれども、基本的には、そういったお仕事は先生方の実績というふうにしていただければいいと考えております。この中にはそれぞれの文学研究科以外のところで活動されたものは全部実績として挙がっております。そういう部分もありますし、大きなものについては、やはり外部資金を取らざるを得ないということで、文化庁とか、科研とか、あるいはその他自治体のいろんな研究費とか活動費を獲得して展開しているという形になろうかなと思います。

【国末】 会場費とかはあまりかからないのですか。中之島センターは基本的に無料で使えるのでしょうか。

【永田】 はい。学内の部局主催のものは無料です。

【福永】 基本的には今ご説明があったように、それぞれの教員なりそれぞれのグループが、それぞれの方法でお金の工面をしながらやっています。そういう意味では全体として、例えば大学がそうした社会連携活動を支援するお金を恒常的に用意しているというわけでもないということですね。特にここにあがっているようなものについてはですね。

文学研究科について言えば、そういう社会連携に限定された活動ではないんですが、教育、研究、社会連携を国際的に展開するという条件で幾つかの研究グループを募りま

して、研究科の全体の予算の中からやりくりして、1グループに今年度で50万円ほど支給しています。教育、研究、社会連携を全部セットにしたような活動をするグループになるわけですが、その1つが、本日の資料にもあります、「くずし字」アプリを制作したグループです。そうした成果が出てくる研究活動に対して、わずかですけれども配分しているということになります。

10数年前までは、いわゆる総長裁量経費のような枠で、そうしたプロジェクトを自由に申請すれば、大学本部のほうで選考して予算を与えるということもありましたが、今やそういうことはもう無くなってしまいました。文学研究科では何とか予算を工面して、社会連携に特化したものではないですが、それにつながる活動に少額ずつ支援をしているというのが現状です。いつまでそういうことができるかという点では、部局に下りてくる予算が年々少なくなっているの、先行きはある意味では暗いんですが、なるべく頑張れるところまでは頑張っていこうと考えております。

**【進行】** ありがとうございます。では続きまして、關様からお願いいたします。

**【關】** 私のほうは博物館という名前を冠しておりますが、実際には大学共同利用機関でございます。皆さんと同じ、大学と同じような機関です。所属が文化庁ではない博物館ですので、博物館活動で評価されることは基本的にないんですね。研究活動で評価される。そういう意味で大学と似ておりますけれども、博物館を持っているということで、博物館の展示及びそれに関わるような活動というのが、いわゆる社会との接点というふうに位置付けております。

そういう面で、私たちは、自分たちの活動をどういうふうに外の方たちに評価していただくかとお考えしています。来週ある外部評価なんかのときに、もちろん皆さんのように資料をつくるわけですが、そのときに、私たちが今回つくるものと、文学研究科で作る資料を比較して、圧倒的に違うのが、今ご指摘のあった個人ベースでやられているということですね。基本的に私たちの機関では、個人ベースの研究や社会貢献というのは、一切外部評価に入れません。つまり、館の事業ではないからという意味ですね。お金が無い、予算が無い場合だったら、個人の力しかないというのはよく分かるんですけども、いったい私たち何の評価をしているのかなと考えてしまいます。つまり、外部評価をするときに、文学研究科の教員の評価をしているのか、文学研究科の評価をしているのか、わからなくなる。文学研究科の評価をしているのだったら、研究科がバックアップする、オーソライズする事業についての評価をすべきではないかとちょっと感じました。

なので、予算が無いというのであれば、逆の発想に立って、事業をうまくオーソライズするシステムをつくれればよいのではないかなと思うんですね。個人の方たちが頑張っていてやっつけらっしゃる……ものすごくやっつけらっしゃいますよね。私、今回見て本当に驚いたんですけども。例えば、委員会をたくさんつくるのは嫌でしょうが、文学

研究科の中で「社会連携推進委員会」か何か組織を作って、そういうところで、位置づけたいかがででしょうか。今年の事業は各ブロックではこれをやります、資金は別かもしれないけれど、などという形でオーソライズするわけです。制度上も問題ないし、十分な効果があると思いますね。個人の活動だけだと、これは「よくやっていらっしゃいますね」としか言えなくなってしまうというのがあります。それが全体を通じて強く感じたことです。

もう一つは、少し細かい話になります。その前にちょっと質問なんですが、私、いただいた資料を全部読んだんですけども、そこに出てくるブロックという概念はいつから出てきているんですか。

**【福永】** 文学部はもともと複数の学科で構成されていたのですが、教養部廃止の頃に1学科に集約されました。大変大括りになりましたので、哲学・史学・文学・芸術・日本学という分野別にいくつかの研究室をまとめ、「ブロック」という呼称を設けました。大学院の方は大学院重点化に伴って、「文化形態論」と「文化表現論」の2専攻に再編し、さらに大阪外大との統合時に、「文化動態論」という、大学院修士課程だけの専攻を設置して計3専攻となっています。

**【關】** そういうことですか。そうすると、この外部評価資料に出ているブロックは、これですべてのブロックなんですか。それとも、ほかにやっていないブロックというのがあるんですか。

**【福永】** お渡しした資料には、この5ブロック1大学院専攻を単位にして代表的な社会連携プロジェクトを紹介しています。

**【進行】** 5ブロックと1専攻、いずれからも少なくとも1つずつは紹介しています。

**【關】** はい、分かりました。そうしましたらそれを前提に今度は細かいことを申し上げます。私たちの機関でも、活動の中で選択と集中というのがすごくいわれています。特に社会貢献というのはとめどもなく範囲が広い分野なので、やり始めると大変なんです。私も自分の機関で社会連携を担当していますが、今は教員数が減らされているので事業を絞っています。今までは、大阪府高齢者大学とか、産経新聞の講座だとか、毎日新聞の講演会とか、ものすごい数の事業が走っているんですけども、その中で、館として対応するものを減らしています。皆さん方はそういう選択はせずに、いわゆる教員の自由度に任せてどんどん広げているんですか。

**【進行】** まず、個人ベースのものと、研究科によってオーソライズされたものとの区別、というのは、大変重要な観点かと思います。正直なところ、今回、社会連携を外部評価

のテーマにしたことで、配布資料のようなかたちで、初めて我々の活動の全体像を見渡すような整理をしました。これまでも毎年、社会貢献活動についてもいくつかの指標に関わる情報収集をしてきましたが、今回、まずはとにかく文学研究科でどのような活動が行われているのか大括りに整理を試みたのです。ここでは個人ベースのものと研究科が正式にオーソライズしたものという区別はしておりませんでした。

その上で、ですが、二つ目のご指摘として言われた「選択と集中」というところ、研究科としてオーソライズするものとそうでないものに例えば分類するのであれば、我々としても、文学研究科の社会貢献はどうあるべきかということ、もう一段深化して考えるべきなのだろうと思います。

**【福永】** 実は正直申すと、そういうご指摘が委員の方々からあるんじゃないかと思っていました。私どもの研究科では、教育は組織化されていて、その辺きちっと体系的にやっています。研究も多くは個人ベースでやっているんですが、それぞれの分野で、年度の計画を決めて進めています。しかし、社会連携・社会貢献の取り組みについては、研究科としてそういう体系化はなされていないというのが、今回情報を集めてみてよくわかりました。たくさんやっている割には研究科が組織として何をしているのかという形では見えてこないというのは、關さんのおっしゃるとおりで、それは大きな課題だと思います。

多少の取り組みをしていると言え、さまざまなイベントをやるときに、文学研究科が共催をするということがあります。年間、十数件はあるかと思います。共催にすると、一応組織としてそれに関わっているという形がとれるわけですが、実際問題としてそういう組織的な関わりの形をつくれているのは少なく、その点がおそらく、文学研究科は数はいろいろやっているけれども、研究科として何をやっているのかを問われたときになかなか答えにくい部分になると思います。おっしゃったことを私どもも大きな課題として受け止めさせていただきます。

**【永田】** 大学のほうから見て、社会学共創というのが近年始まったところですので、まだ評価の指標なども整備はされておりませんし、各部局によっても温度差もあり、それぞれなんですね。しかし、私たちとしては、研究科もおそらくそうだと思いますが、各先生方がされているものを「大阪大学の研究」というふうに考えていっておりますので、同じように社会学連携活動も、今の段階では各先生方が独自で研究活動を延長するような形で皆さんされていますので、それをその部局での活動であるというふうにしてカウントをしますし、それを評価しているんですね。ですから、研究科の共催とか、協力とか、あるいは何らかの形でオーソライズされたものだけという、もうごく限られたものだけになっていってしまう気がする、それはまたやり方を少し考えていくべきなんじゃないかなと思いますけれども、大変いいご意見をいただいたと思いますので、協議していきたいなと思います。

【福永】 先ほど、教育、研究に関する年度計画を立てると言いましたけれども、それと比べると、社会連携・社会貢献に関する年度計画というのは非常に大ざっぱで、計画が全くないとは申しませんが、今回お示した情報は結果として出てきたらこれだけあるということで、必ずしも年度の初めに社会貢献・社会連携をどういう形で進めるかというのは、私どもはきちんと計画あるいは目標を立てて、それに向かって進めているというふうには言えないと思うんですね。それでも各教員が意識を持ってやっているということは評価したいと思うんですけども、この辺は、当初から計画なり方針なり方向性をしっかりと認識しながらやっていくべきじゃないかと感じるところです。先ほど、何の評価をやっているのかよく分からないとおっしゃったのは、共感すると言ったらおかしいですけども、全くごもつともなことだと思います。

【高橋】 ちょっと一言いいですか。個人ベースで予算獲得をいろいろして動いていたり、實際上、文学研究科として、何か成果を集約することもできていないという点は、今言われたとおりなんですけれども、年度目標という点では、研究室ごとに、研究のこと、教育のこと、それと実は社会貢献も目標をつくってやっています。ここで挙げているのも、個人とは言うものの、単純に個人がやっている講演会というわけではなくて、研究室単位あるいは研究室を越えて計画したことを挙げてもらっています。1人の教員が中心になっている場合のものも結構ありますけれども、研究室の活動の中で動いている事業を挙げるということで、一応この資料の中に盛り込む方針にしました。

【關】 私は別に批判しているわけではなくて、これだけ立派なことをやっていらっしゃるので、見せ方を工夫されたらというくらいの意味で申し上げました。

そのときに、細かい話になりますけれども、先ほどから「共催」や「主催」という言葉が出てきました。実は私の機関でもこれは大きな問題になっています。共催、主催は全く問題ないと思うんですね。ただ、「協力」というのはいったい何なのかという点です。先日も、外部の先生方が集まる人事委員会、あるいは運営会議という私たちの最高決定機関において、外部の方たちからも指摘がありました。要するに、社会貢献活動と言いつつも本業ではないことに対して協力をしているということが問題になったんですね。つまり、シンポジウムは研究ですからいいんですけども、有料の講演会か何か出ていく。そのときに協力という形をとったとする。その場合、その教員なりその活動を果たして肯定的に評価できるのかということです。他大学の先生方に聞きましたら、大学では評価していないと思うんですね。国立大学、私立大学含めてほとんどの方たちが。そこから辺難しい問題だなと思いました。私たちはその点を指摘されるまで深く考えていませんでした。たしかにほかの機関の業務に助けを出すことは問題かもしれない。本務をしっかりとすることが今や第一であって、外のことは二次的なことだから、それを社会貢献と言えるのかどうかは難しいと言われました。

ですので、大阪大学の場合も、いろいろな活動が各ブロック単位で行われているんですけども、主催者と教員との関係がやはりよく分からないものがあるんですね。ポスターやチラシを見ても、大阪大学の「お」の字も出てこないものが幾つもこの資料には入っています。せめて名前を入れておくとかをしておかないとまずいような気がします。私も全国中講演に行きますけれども、その活動を堂々と民博の活動に入れられるかと言ったら、まず間違いなく外されるでしょう。私のホームページには入っていますけれども。業績にもなりませんし、館の活動としても認められていないですね。

だから、せつかくやっていच्छることを見える形にすることで、おそらくこの評価書に書かれているようなものがより生きてくるのではないかと思います。

その意味で、例えば「皆さんの活動に関してなるべく共催にしてください。共催申請用のフォーマットは簡単にしますから」とか、何かうまい仕組みをつくれば、個人ベースでやっていく人たちの意志をそがず、かつ評価にも役立つ形ができるのではないかと思います。

一応、このくらいにしておきます。

**【進行】** ありがとうございます。それでは、武内様、お願いします。

**【武内】** はい。阪大という大学のイメージとして、産学連携などは非常に進んでいる感じはあって、その中で先ほどお聞きした『日経グローバル』で1位だというのは、すごく良かったと思います。文学部からご連絡をいただいたときに、実はイメージがパッとわかなくて「文学部での社会連携ってどういうものが出てくるのかな」と思い、それでいただいた資料を見て、「ああ、そういうことか」と。こういう形でこんなにいろいろしておられるのだというのが分かって、また先ほど關様、国末様がおっしゃったことと合わせて、改めて理解しました。たぶん懐徳堂とか適塾のあり方も、ある意味、プロモーション的に使える内容で、いいコンテンツとしてうまくそれを活用すると、アピール力がより出てくるのではないかと思います。

文学部のアプローチとして、今もやっておられる講座のような形で、市民に向けて、文学部で掘り下げられた教養的なものをどう共有していくのかとか、そういったことに関心がある方にどう発信していくのかというふうな連携のあり方がたぶん一つのパターンとしてあると思いますし、そこが文学部としてとてもパワフルなところだろうと。それは結構幅広い方々にもアピールするし、阪大の特色を出せるものじゃないかとも思いました。

実際この年になってやっと「教養って大事だな」と思うみたいなのところがあるのですが、そういった意味で、深掘りされたものを発信していただけるのは有り難いですし、その発信に懐徳堂とか適塾をうまく使うということは、ブランディングとしてもすごくいいんじゃないかと思います。

もう一つは、社会との関わりということですね。先日開催が決まった万博のテーマもこ

れから細かに詰めていく過程で、いろいろな場面が出てくると思いますし、地域の経済活動や、どういう施策を推進していくのか検討する中で、産学官で何ができるかみたいな話も出ると思います。ある地方都市の方々とお話をしていて、行政と経済界で委員会をつくって、何かを「やりましょう」という場合、やはり受発注関係であったり、規制の許認可の関係であったりなど、個別の利害関係で文句を言っているように見られてしまう場面もあり、バランス的に委員会をつくった時のあり方がなかなか難しい。「そこに「学」が入ってくるととても落ち着きがいいんだよね」という話をなさっていました。三角形のバランスがうまくとれるというか、そこに「学」が入っていただくことによって、何か割と中立的なあるべき論の話ができて、それがまた意見が活発に出るきっかけになるんじゃないかと思うんです。

それは理工系のテーマもあるでしょうけれど、文学部から文化という観点で発信すべき施策も多くあると思われます。実際にそういったことをやっておられるケースももちろん既にあると理解していますが、さらに注力することで力を発揮いただけるのではないかと思います。

もう一つは、ファシリテーターの育成というのが大きくあると思います。実は文化庁の文化審議会の文化政策部会で委員をさせていただいたときに一番感じたのは、すべての課題は「人がいない」「お金が無い」ということに行き着くということでした。特に芸術系のことをなさる方は素晴らしい創作能力があるのだけれども、それをマネジメントすることに関心がない。結局、芸術を理解していて且つ、マネジメントができる人が全くいないと。もちろん全然違う学部を出た方が逆にこの分野に入って来られることもありますが、やはり少なく、そこはかなりネックになっている。そうするとお金が生めないで次に続けられないことになり、予算も、収入として企業から協賛を得てくるにしても、芸術が素晴らしくても、協賛に至る説得力が足りなくて、壁にぶち当たっているというようにお話もたくさん聞きました。阪大の文学部って、その点が強いことを今後の特色にしてもいいのではというくらいのイメージもあります。文学にしても芸術にしてもそのものの素晴らしさの上に、そういった人材の育成が、次の力になるのではないかと。それ自体が社会との連携につながるようになるのではないかと。次への広がりも出てくる内容だと思います。

それぞれの活動で、既にそれぞれに関連してなされているところでもあるのですが、今申し上げたようなことにさらに取り組んでいただけたらと思っております。先ほどのお話で、どちらかというブランドینگは余分なことをそぎ落とさなくてはいけないというなか、いろいろやってほしいということが多くて、広がってしまいますけれども。

今ちょうど、企業でも行政でも何をやっても SDGs が出てくるという状況でして、そういう点では、文学部のできることを SDGs と関連させることが求められるようになると思います。実現させるだけではなく持続可能であるために経済的にやりくりしなくてはいけない、それで経済的にも発展するんだ、みたいなところがセットです。もちろん社会学とか法学とか経済学などの文系の他学部もありますが、文学部ができることも

実はかなりあるのではないかと思います。一番心が豊かになるとか、そういったところのアプローチから、SDGsにつなげていくというようなこともあるのかなと。

それから、アプリをつくられたというところを見て、ちょっとその発想は画期的というか、パッと見たときにはあまり思っていなかったんですが、確かにそれって、先ほど国末様からもありましたように発信の手段として、文学部で関心を持って取り組まれていくというのは素晴らしいと思いました。ICT 抜きでは、さらにデータなくしては今後は駄目だということが今企業でもさんざん言われていますし、発信して、伝わって、はじめて価値があるとされる中では、こういったアプリのようなものを、文学部の研究とつなげていくことによって、社会連携というか、研究内容がより伝わりやすく、より広がることになり、それがイコールより効果を上げるといったことになるんじゃないかと思えます。このような取り組みが一つここに入っていることが非常によいと思いました。

**【進行】** どうもありがとうございます。最初にご指摘いただいたことはブランディング、それから教養的なものを中心として市民の方々への発信というようなことがその重要性として求められるというようなこと、SDGs のこともひょっとしたらそこに関わってくるのかもしれない。研究科長から何かございましたら。

**【福永】** 大学でも今、SDGs にどう人文系が関わっていけるかということが結構話題になるんですけども、SDGs の目標を見ると、例えば生涯学習の機会促進ということを書き込まれているので、そこには文学研究科、人文系は関わっていけると思うんですね。それ以外のところでは、例えば貧困の解消とか、飢餓をゼロにとか、少し文学研究科としてもひねりを加えないと入っていけないような目標も多いので、そのところでどういうふうに関わっていけるかという戦略を練らないといけない。生涯学習については割と今のスタイルでも関わっていけると思うんですけども。

今や大学を含めさまざまなセクターが SDGs の関わりを深くしていこうとしている段階なので、私たちもそれについてはブレインストーミング的な内部での議論が必要になってくるのではないかなと思っています。今は、個人ベース、研究室ベースで考えてやっていくということにとどまっているので、もう少しそれを文学研究科全体の戦略としてどう展開していくかということを考えなくてはいけないなと痛感しているところです。

**【武内】** 企業でも一緒です。うちも「何をやるべき？」というところはあって、それでどうやって持続できるように稼ぐのかというところは引き続き課題です。

**【關】** たしか岡山大学は SDGs を大学の目標に掲げて、SDGs 大学として全学部にそれを行っているんじゃないですか。何をやっているか、具体的な事業は知りませんが。

【福永】 私たちのところでも、じゃあ SDGs の到達目標の年度が終わったらその後どうなるんだろうとか笑い話みたいなこともあるんですけども、人文系が今後の人類の持続的な発展の可能性にどうコミットできるかということは、やはり工夫して考えていかないといけないところです。それは社会連携だけじゃなくて、教育、研究も含めて、そこにどう関わるかということ私たち自身の課題として、今、武内さんがおっしゃったことを十分認識していかないといけないという気しております。ありがとうございます。

【進行】 もう1点、芸術分野のマネジメントに関して阪大の大きな役割がそこにあるのではないかというご指摘がありましたが、これは、永田先生、もし何かございましたら。

【永田】 励ましの言葉をいただいたと思ひまして、大変うれしく思いました。私たちがやっているプログラムは社会人教育のプログラムですので、大学の中に構築されているいわゆる授業以外のところなんですね。そういう意味では教員の自発的な考えというか思いでやっていることなんです。

それで、6年間やってみると、ちょっと勢いでやったようなこともありまして、最初はどうなるかっていうようなことだったんですけども、それなりにレスポンスというか、市民の中で、私たちはアートを使っているんですけども、アートを使いながら何かやっていきたいと思っていられる方がこんなにも多いのか、それから、こんなにも強い気持ちでされているんだということが分かりますね。それは発見で、普段、学生たちとやりとりをしているんですけども、社会人とやりとりをすることで私たちもずいぶん学んだと思います。非常にいい経験になったと思ひまして、それは私たちの研究、教育にも跳ね返ってきているし、私たちができることの一つには、先ほど研究科長もおっしゃいましたけれども、社会人の育成というのは今後の私たちの社会との関わりを考える上では重要な根底になってくるんじゃないかなという感じですね。

【進行】 どうもありがとうございます。少し時間が押していますけれども、ここでいったん休憩に入らせていただきます。

〔後半開始〕

【進行】 では、後半の全体討議に入らせていただきたいと思います。ここまでの質疑において、かなり本質的な論点にも言及いただきましたが、全体討議では、まず大きな問題として、人文学の研究機関の社会貢献、社会連携というのはどのようなものであるべきなのかということについて、ご意見をいただきたいと存じます。

もちろん、個別の事例それぞれについてでも結構です。プロジェクトの発信の方法、あるいは阪大文学研究科のブランディングの問題、なども話題に上がりました。いかがでしょうか。

【關】 1点よろしいですか。

全体として、阪大だけの特色なのかどうか分かりませんが、明らかに私たちと違うなと思ったのは、高校と教育委員会との連携ですね。ここはさすがに、やはり大学で学生を持っていらっしゃる場所だなと感心しました。我々の機関では博士課程後期しか持っていませんから、こういう事業は考えられません。公開講座や新聞での記事などは私たちもやっているんですが、唯一やっていないのはここだなと思いました。ここはやはり大学の強みですね。おそらく桃木先生たちのグループでいらっしゃる高大連携の問題が背景にあるのでしょうかね。大学にも研究会の拠点が置かれているようでもありますし。たしか人文系は特に歴史教育を含めた制度改革がこれからありますよね。

【福永】 「歴史総合」ですね。

【關】 「歴史総合」のこともあるので、高校や教育委員会との連携は非常に注目される分野です。ぜひとももっと伸ばしていかれたらいいんじゃないかなと思いました。伸ばすというか、もっと大々的に見せるようにしてもいいんじゃないかなという気がしますね。

【進行】 ありがとうございます。いかがでしょう。高大連携の部分について何か補足して。

【高橋】 この事業については、もともと阪大が核になってやっていたんですけども、それを数年前ですかね、2015年の段階から全国組織も別につくって、そこで発信しているようにということで、その甲斐があって、たぶん先ほど話が出た「歴史総合」の改革のほうに結び付いたのではないかと阪大のメンバーは自負しておられるということでもありますし、そういうところでどんどん発信していくことが今後とも必要になるというのはご指摘のとおりだと思います。

【進行】 確かにこの分野はメディアにも割と露出の多いところで、よくインタビュー等で取り上げられているように思います。歴史教育には、この間話題になった、教科書における坂本龍馬の扱いの問題など、社会的関心の高い事柄があります。アピール度の高いところで研究と社会連携が関わっているところですから、そこを生かしてというのは、文学部の強みを生かす一つの軸になりうるのかと思いました。

それともう一つ、高校との連携という点では、島根県の隠岐高校とやっている交流も大学らしいものではないかと思います。研究科長、何か……。

【福永】 やはり文学研究科として伸ばすべき重要な柱の一つが社会連携のテーマだと思うんですね。悲しいのは、こんなことをあまり言ったら繰り返り言になるんですけども、そこに資金を研究科としてなかなか投入できないというじくじたる思いがありまして、この高大連携の歴史教育研究会も、継続的に科研費をとって、それをもとにやっているということです。

【關】 ああ、そうですか、これも。

【福永】 立ち上げは21世紀COEだと思いますけれども、継続的に全国展開をしていくためにはそういう外部資金を投入してやっているということで、これは活動が評価されれば外部資金に結び付くというところもちろんありますが、こういうふうに入力したいところにリソースを投入できるような状況をなんとかつくっていかないといけないなというのはお話を伺って痛感いたします。

そのためにはやはり「選択と集中」ということになってしまうので、そういうあり方、ありていに言えば、教員あたりの研究費を少しずつ節約して、それを特筆すべき活動を行っている研究グループに投入するということをしていかないといけないんですけれども。少し困難があっても、やはり来年度以降もなんとかそういうことをやっていかないといけないなという覚悟ではいます。

【關】 どうしても科研費だとお金の切れ目がプロジェクトの切れ目みたいになってしまいます。例えば、私は幾つかの別の大学のプロジェクトに参加しています。地方自治体と協定を結んでいるようなプロジェクトです。大学側からお金をもらいながら出張して、現地に行けば、自治体側が場所を含めてなんとかするというのが多いですね。ただ、謝礼が発生したりするので、ちょっと処理が難しかったりしますが。

【福永】 そうですか。それはちょっと見習わなくてはいいけませんね。文学研究科もそうした社会連携を行っていますよと言っても、インフォーマルな形でそれぞれがやっているというのではなかなか評価にも結び付かないというところがあります。そういう取り組みは協定を結ぶなどの形で正式な連携として位置付けていかないといけないというのを、私たちの課題として非常に感じているので、そういう意味では民博でやっておられることを十分に勉強させてもらって、そういう方向になるべく向かっていきたいと思っています。ぜひまたいろいろお知恵を拝借できればありがたいです。

【進行】 参考までに、民博で結ばれている協定の中で際立った例を。

【關】 私の機関の場合は、ほとんどが研究レベルの協定です。なので、研究プロジェクトがあれば、外国・国内含めてどんどん提携しています。例えば食のテーマだったら、

その分野の学部を持つ立命館と協定を結ぶとか、地域振興だったら大手前大学と結ぶとか、そういう形でどんどん協定を結んでいます。3年たってプロジェクトが終わったら破棄するか、新たに協定を延長します。そうすると、協定に基づく出張だから公費出張になるし、堂々と先生方も出張できる。ご存じのとおり、今、出張がすごく難しくなっていますよね。本務でないものに関しては「休暇を取れ」とかいろんなことを言われます。なので、協定を通じて社会活動が公にできるような形にするというのを今目指しているんですね。

【国末】 去年、私どもの『GLOBE』と北海道大学で共同のシンポジウムをやったのですが、それも、それは出張費だけ私たちが出して、北大と小樽商大が場所を用意して、人を集めて、という形でした。この場合、特に協定は必要なかったのですが。

【關】 ああ、そうですか。共催でもいいんですよ、一時的にね。

【国末】 ええ、そうです。そういう形でネットワークをつくっていくというのが一つのやり方ではないかなと思いますね。

【關】 そうですね。その意味で、講演ベースでしたけれども、朝日カルチャーとの関係というのはどうなっているんですか。中期目標に書き込んでいらっしゃいますよね。

【福永】 中之島センターで行っている「Handai-Asahi 中之島塾」ですね。朝日カルチャーと大阪大学との共同講座で文学研究科も協力するかたちになっています。

【武内】 それは朝日カルチャーさんと阪大で、どちらからか申し入れがあって、その上で詰めて提携を結んで、という流れがあったということですね。

【福永】 はい、そうだと思います。

【武内】 理系の場合は何かの研究に対して出資してもらっていたり、阪大では共同研究も多数あると思います。文学部では、そういうふうに、ある部分に関して企業と組んで、今みたいな講演をやる形以外に何かなさっていることはございますか。いかに企業からお金を出してもらおうかを考える場合に、企業側も勝手には出せないみたいなのところがあるって。

【福永】 これまでの事例で言うと、基本的に外部資金というのは大半がいわゆる科学研究費ですね。あとは、民間の助成財団のいわゆる研究助成金のたぐいです。企業と独自に何か共同研究契約を結んでやっていくというのは、これまでほとんどなかった。いま

芸術系で、ある民間組織の資金で共同研究を立ち上げて、その経費で例えば特任のスタッフを雇うとか、そういうレベルまでの話が1件だけ進みつつあるんですけども、非常にそれは例外的なものです。これから開拓していかないといけないと思うんですけども、これまでのところは公的資金と助成財団からの助成でほとんど賄っていたというか、そこから先には広がっていったいなかったんですね。

逆に、武内さんに伺いたいのは、どういうアプローチをしたらそういう企業とか、あるいは学術団体、助成団体以外のネットワークを広げられるというふうに思われるか、何かアドバイスがあったら……。文学研究科の専門分野をもってどういう形でそういうネットワークづくりができそうかというのは、何かアイデアはございますか。

**【武内】** 提携なさっているところの関連で、どこにひも付けられるかとか、あと、どういう企業理念でやっていらっしゃるからこのテーマとは合うんじゃないかとか。この間テレビで松竹さんだったか、「いかに協賛してもらうかがポイントだ」と。「中堅企業版の四季報を見て、とにかく関心のあるオーナー会社の社長さんに頼むと、そのほうが出していただけることが多いですよ。」というようなことを言われました。特に文化芸術系はそうじゃないかなという気がするのです。しかも資金に余裕がないといけませんから、中堅クラスの会社にとというのはテクニック的にはあるかもしれませんが。

**【福永】** そういう取り組みを基本的にやっていないですよ。会社に何か営業に行くようなこともやっていません。

**【武内】** 当社でも実は、コンベンションセンターをオープンするときに自主事業を企画してセミナーなどを開催しました。そのうちの1つでは、医学会の仕事などで関係のある京大の先生にご一緒していただきました。ノーベル賞の受賞者に集まっていたという企画で、先生が動いてくださいました。我々が記念事業として資金の負担は引き受け、先生にはその他に、関連の企画を展示してプロモーションに活用していただきました。単発であれば周年事業とか、関西系企業、特に大阪の企業にとって阪大は定番のパートナーみたいなところがありますし、あとは、個別に卒業生とか、知り合いとか、同窓会とかいうラインというのは、結構、最初のきっかけづくりとして、うまくいったりするところもあるので。正面から門をたたくより、取りあえず何となく飲み会から始まるみたいなケースもあるかもしれません。

**【關】** それは大学の強みね。卒業生が必ずいるから。

**【福永】** 今、大学全体で卒業生へのアプローチを強めていて、年に2回、一つは東京で、もう一つは地方で「大阪大学の集い」というのをやっているんです。そこでは残念ながら文学研究科・文学部の卒業修了生の参加は多くありませんが。あと必ず交流会をセ

ットして、ネットワークづくりの機会が設けられています。

【武内】 今、ある地方都市でコンベンションセンターの運営を担当することになっているんですが、地方なので、待っていては来てもらえませんし、イベントの誘致も簡単ではありません。きっかけとして同郷の方の県人会を当たったら、財界でお名前が出てくる方が結構いらっしゃって、そこから企業の研修会などをやっていただけないかお願いしたりしています。どこかにシンパシーがないと遠方での開催はなかなか考えていただけないので、「ご出身のところでぜひ」みたいなことでお願いに行くとか、そういったことはありますね。

大阪・関西は、地方というには多少大きすぎるので、中小規模の地方都市よりはやりにくくもありますが、東京よりはずっとやりやすいと思います。東京は大きすぎて。「大阪だから」という意味付けでいくと、阪大として、リレーションをつくりやすいところはあるかもしれません。

【国末】 やはり文学系になると、「ここにお金を出すのだ」という名目をなかなかパッと示しにくい感じはしますね。SDGs は一例ですが、ビジネスにもっと近いようなところだと、何かお金を出す名目ができるんですけれども。文学に向いているところというと、例えば出版業界と連携するとか……。お金を単に出すのではなくて、一緒にプロジェクトをやるという形の連携もあるんじゃないかなと思います。

朝日新聞社が大学とよく実施するのは、共同の世論調査です。金額は大きくありませんが、研究活動とこちらの調査能力とを一緒にするプロジェクトとして広報効果は結構あると思います。

【武内】 BtoC に目が向いているところであれば、「学生」を持っていて、かつ、文学に関しても「教養」というレベルで市民の方にアピールできる「大学」は魅力的なのでは。それに「大学のお墨付きもある」的な、「大学」というブランドと、学生生徒というリソースといったものと、それから、内容に関しても、本当はすごく難しく「文化」「文学」とか言われると、正直私などは、敷居が高いと思ってしまいますのですが、今は、アニメも文化だし、ゲームも文化だということで、文学部として取り扱っておられる研究の深いところをもっと広げて見せられれば、BtoC の対象としてはすごく魅力的に映る可能性が大いにあると思います。

【進行】 なるほど。文化的な領域をマーケットにしておられるような企業と共同のプロジェクトということで、文学部のほうも社会に関わっていることをアピールする、そういうイメージでしょうか。

【武内】 ブランド力もアートです、みたいなところもあるので。先ほどの「記憶の劇場」

もロゴマークを作っていたら良かったですよね。あれなんか非常にセンス良く作っておられる。それがあって結構インパクトにもなったり、広がる発信力になったりするのかなど。

【国末】 企業と違うので、社会のニーズにあまり合わせすぎると大学じゃなくなってしまうし。ブランドをつくる場合も、社会に寄りすぎるとブランド自体が壊れてしまうこともあるので、そこが難しいと思うのです。

【關】 難しいですね。どこまでこびるかというのが。

【国末】 メディアの場合、社会に迎合しがちです。ある意味で、そうすることがメディアの大きな役割なので、世の中の流れについて行けばいいんだけど、たぶん大学はそういうわけにはいかないと思います。

【關】 いかないですね。やっぱりそこは線引きしたいところですね。でも今、芸術なんてベストセラーが次々、経済人にとっての絵画とかいう本が書店に山積みされていますよね。

【進行】 この2年ですね、急激な変化は。ほんの数年前、本のタイトルに「美術」という言葉を入れるなというのが、むしろ出版社側からの要求でしたけれども。

【關】 今は入れないと（笑）。

【進行】 週刊誌などが急に定年退職者マーケットに切り替えられたところでワッと変わった。定年層に対するアピールとして、美術は大きいようです。本当に急に変わったと思います。

【關】 今は追い風が吹いていると思われそうですよね。

【進行】 ただ、そうしたところでは、商品化されたレベルでの知識が非常に重宝される部分があります。しかし、やはり違う観点というのか、そういう中で取り上げられないようなもの、売れないものの方に実は結構大事なものもあつたりします。大学も単純に世の中のニーズに乗っかってしまうと、社会貢献ということを考えるときに、ちょっと違うのかもしれない。両面なんだろうが。社会のニーズと無関係にやられている時代ではないし、そうあるべき時代でもないと思うんですけども、ただ、乗っかりすぎると大学でやっている意味がなくなるというところはあるのかなと思います。

【關】 バランスの問題ですね。

【国末】 それで言いますと、イベントの参加者の年齢層というのはどんな感じなんですか。写真を見ると、かなり高いなという感じがしたんですけども。その辺りはどうなんでしょうか。

【進行】 どうでしょうか。懐徳堂などは比較的高齢層だと思います。定年になられた方とかが割と大勢来られているなという印象があります。「記憶の劇場」なんかは、受講生として割と若い方も入っています。現代のアートに関わるものなどは、やはり若い人が来るんですね。

ついこの間も、その「記憶の劇場」の関係で、学内でコンサートがありました。イスラエルの人とアルゼンチンの人のデュオだったんですけども、これは本当に若い人たちがいっぱい集まっていました。無料ですしね。企画によってずいぶん年齢層が変わるという気がします。

【国末】 新聞社は、いかに若い層にリーチするか、必死になっています。紙の読者自体がもうかなり高齢化していますので。ものすごく苦勞しているんですけども、そこが大学とちょっと違うのかな、と思います。大学のほうは、学生がいるから無理しなくてもいいや、という感じでしょうか。

【關】 私たちも講演ベースだと、明らかに高齢者ばかりですね。若い人たちを一生懸命リクルートするために梅田のグランフロントと協定を結んで、カフェを使ったサイエンスカフェみたいなのを試みています。明らかに聴衆の年齢層は若いですね。

ただ、問題はその2年ほどやりましたが、その評価が問題です。そういう活動が私たちにどのようにフィードバックしているか計りようがないんですよ。例えば若い人たちの入館者数が増えたとか、数値で表れればいいのですが、たとえ増えたとしても、因果関係が全くつかめない。だから、若い人たちを取り込み、広報するのもいいんですが、それがどのように結果に結びつくのかがよく分からないんです。社会連携の難しさはここなんですよ。単に流しっぱなしでいいのかとか、それで私たちは社会的役割を果たしているのかとか、まじめに考え始めると大変な問題を感じますね。

【進行】 民博は入館者の年齢層なども調査されているんですか。

【關】 していますよ。全部取っています。それから、講演会その後も全部アンケートをとっています。年齢層、どの地域から来られたか、何を見て来られたのか、という内容のアンケートを取っています。分析もしていますが、近隣が多いということと高年齢層が圧倒的に多い、それも男性が多いことがわかっています。

【福永】 武内さんは顧客のニーズはどうやってつかんでおられるんですか。

【武内】 あまり市民向けのビジネスではないので、セールスに際しては、特定の顧客に対してやっているというのがあります。

【福永】 こちらから出て行って働き掛けをおこなっておられるわけですか。

【武内】 はい。

【福永】 そういうときに、相手方の情報を少し事前に調べてこういう戦略で行ったらいとか、当然、そういうことは会社としては考えながらやっておられるわけですね。

【武内】 まあ、分野によって。医学会であれば、どの分野のどの先生がいつ会長になれるかなどというデータを調べて、その先生には誰から紹介していただくか、必ずアポを取って、どの段階までに伺うかとか、学会の中で他の委員会の先生にもご意見をお聞きするなど多方面に。

【福永】 そうですか。我々はここらからの働き掛けというのは、もうほとんどないんじゃないのかな。どうですか。

【進行】 ないですね。というか、そういう発想もノウハウも……。それはひょっとしたらこれから求められるのかもしれませんが、なかなかそれをみんなでやろうと言っても、どこからどう手を付けていう、まさにそういう状況だろうと思います。ただ、そういうやり方をやるべきか、というところから議論をしてもいいのかもしれませんが。

【国末】 そんな余裕があるのか、ということですね。その余裕があったら、研究でもしたほうがいいのか、という面はあると思います。

【武内】 そういう機能を果たしておられる特定の先生や部署は全くないのですか。あまり学内の組織構造を知らなくて。

【福永】 少なくともそういう専従の人はいないですね。文学研究科にはいないです。全学だと、少しそういう人を準備しようかというふうにはなりつつあるんじゃないかと思えますけれど。

【關】 職員としてですか。教員としてですか。

【福永】 いや、教員と事務職員の間のような立場の人ですね。外部資金獲得では URA のようなサポート人材が配置されています。

【国末】 今、『GLOBE』は沖縄科学技術大学院大学と提携しているんですけども、あそこは副学長が何人かいるのですが、その内の1人は研究者ではなくて、広報の専門家なんですよね。少し前まではイギリス人が務めていたと思うのですが、もう広報専門でバンバンやっていて、スタッフも何人か広報専従者がいて、朝日新聞にもどンドン売り込みをかけてきますよ。

【關】 世界中の学生がマーケットの対象ですものね、あそこはね。

私たちは人間文化研究機構という組織の下に入っていますよね。本部は東京の神谷町にあるんですが、この本部のほうで若手の人材ということで、人文知コミュニケーターというのを採用しています。これが年に2人くらい採用しています。私たちの機関にも今年から配属されました。だいたい准教授クラスです。ただし、研究以外の業務を持たせています。最初からそれを条件で雇うんですけども。今何をやっているかという、まさに広報活動と、社会連携です。大学教育向けのワークシートの作成などをやっています。

雇いが機構本部なので、我々のほうの人件費を使っているわけではありません。この点は負担がなくて楽なのですが、任期付きのポジションです。こういうファシリテーターみたいな人材は今求められているので、「記憶の劇場」ではないですが、お金を取りやすい分野ですね。

【武内】 先生、すみません……。

【進行】 はい、武内様はそろそろご退出のお時間ですね。すみません、最後に一言、文学研究科の社会連携活動はどうあるべきかということ、それと、現状としてどうご評価いただけるのかということ、簡潔におっしゃっていただければ。

【武内】 今回まとめて資料を拝見したり、お話しを伺って活発に活動していらっしゃるというのを改めて知りました。

期待される場所は非常に大きいと思いますし、この研究分野の深いところをどういうふう発信していくとか、またそれを阪大というブランドとして、できればそれに資金が付いてくるような形の働き掛けになっていくと素晴らしいと思います。社会と連携する大学にとっての社会貢献の意義と合わせて、研究自体も社会とともに活性化できるんじゃないかと期待していますので、ぜひ頑張ってください。

【進行】 ありがとうございます。〔武内様、退席〕

【關】 ところで、たくさん新聞記事を集められていますね。これはおそらく各個人の方が自分のプロジェクト用に集めたのを提出されているのだと思いますけれども、文学研究科ではプレスリリースというのはどういうふうにしてやっていたらっしゃるんですか。

【進行】 プレスリリースは、本部のほうから、定期的に記者会見とかルートがあって流しております。文学研究科各部局は独自にそういうルートを実は持っておりません。大きな行事で何か必要なときは、例えば今年であれば文化勲章の受章者がありましたので、その記念の行事をやるというようなときには、教員の個人的なネットワークで記者の方に来ていただいたり、情報を取り上げていただいたりという形になっています。ただ、これも部局独力で工場的な体制をつくれるかという、なかなか難しいだろうと思います。この間、本部の方が来られて、部局と全学レベルで連携する体制を整えようとされているようなんですけれども、まあ、そのような状況です。

【關】 大学全体の広報の問題でもありますからね。

【高橋】 そうですね。大学全体の記者会見というのは考古学なんかでやると、どうしても科学部の記者とかが来てしまって、阪大との付き合いがあるのはやはり理系なものですから、理系の記者が常に行くというイメージが……。結局そこでは十分に伝わらずに大きな記事にならない。そうなるとう結局は、変な話が、個人的なルートで話したほうがうまくいくことになります。

【關】 全くそうですよね。私もそうしています。

【福永】 一応、大学から記者クラブに情報が行くんですね。そこから例えば文化部系には回らなかったりするというのがあって、そうすると、文化部系の編集レベルの人、デスクレベルの人に、直接こちらから個人的に投げ込むとか、そうならざるを得ないので、大学でプレスリリースをするんですけども、記事にはならないというのが人文系の場合にはやはり少なくない印象があります。

【国末】 新聞社ってある意味で役所みたいなところですから、情報がなかなか横に流れないんですね。だから、たまたま科学系の記者が情報に接した場合には「おれには関係ないや」で終わってしまうこともある。横にちゃんと回ればいいのですが。

【關】 私たちの機関では、月1回の割合でプレス懇談会があります。在版の主なプレスに来ていただくんですけども、担当者は生活部や文化部の方です。

この方たちに、例えば私が考古学関係の話をしても駄目なときが多いですね。「専門が違う」と言われるので、私が別に担当者に電話して情報を流したりしています。

もう一つ、私の個人的な経験ですが、関西で情報を流すと、やはり関西本社・大阪本社の記事になって、全国にならないことが多いんですよね。絶対に全国に流れないというわけではないですけども。それで、工夫して最近では文科省の記者クラブで流すという方法をとったりしています。東京に情報を流すと、たいていの記者は「プレスリリースはどこからしますか」と聞いてきます。「大阪でします」と言うと、たいていの場合「それでは大阪で扱うことになるから、我々はちょっとタッチできない。」といわれます。大阪本社と東京本社とでは判断が全く別だからでしょう。

【福永】 そういうことなんですね。プレスリリースも戦略的にやらないと、なかなか…。

【關】 じつは私のような考古学分野はいいんですけども、ほかの同僚たちはそういうルートを持たない人が多いので、立派な研究をやっているながら、東京ではほとんど知られていないという状況が起こっています。このいびつさをどうやって解消しようかというのが、今、問題になっています。

【国末】 メディアで知られるのと学会の知名度とは、また違うのではないのでしょうか。メディアで知られることがかえってマイナスになる、という話も聞いたことがあります…。

【福永】 それは分野によってはあるのかも分からないけれども、人文系は結構メディアに期待しているところは大きくて、今、大阪大学では、他の大学もそうだけれど、研究力が日本の大学は低下しているというので、私どものところも総長が研究力の向上を大きな目標として掲げていて、そこに注力しているわけですけども、じゃあ研究力をどうやって測るのかというと、例えば理系ですと、エルゼビアの **Scopus** に入っている雑誌に掲載された論文の引用順位等で研究力を測れるかもしれない。人文系はそういうところにはあまり雑誌が入っていないので、いつまでたってもカウントが上がらないわけですよ。そういう中で人文系の研究力を測るかというときに、自分たちが「これはいい研究だ」と言っても仕方ないわけで、やはりアカデミズムと社会の橋渡しをするマスコミがこれだけ注目してくれたとかいうのが、結構、いわゆるエビデンスになるんです。

【關】 それは一番強いんです。

【福永】 そういう意味でプレスリリースというのは、確かに戦略的にやっていかないといけないというところはあるんですね。

【**關**】 今回の資料を拝見していても、研究が紹介された記事と、自分で書いている記事とが一緒になってしまっていますけれども、やはり研究を紹介されている記事というのは非常に価値が高いですね。そこを研究の宣伝と言いますか、社会貢献と言いますか、強くすることは大事かなと思います。

【**進行**】 おっしゃるとおりです。

では、だいたいご議論を出していただけたと思います。最後に、先ほど武内様にしましたのと同じ問いなんですけれども、文学研究科、人文学の研究機関の社会貢献・社会連携はどうあるべきなのかということについてのご示唆と、この我々の研究科の現状についての印象、ご評価というところを一言ずつお願いできますでしょうか。どちらからでも結構です。

【**国末**】 なかなか難しいとは思いますが、私ども『GLOBE』がどうやってブランドをつかっていくのかという面と少し重なる点があると思います。『GLOBE』は基本的に、「グローバルな海外とのかかわりがどこかに必ずある」というのが条件なんです。今、日本全体が内向きですから、海外ニュースはほとんど関心を集めません。なので、そういう意味で社内的にもなかなか注目されず、そこで踏ん張っていくのは苦勞が多いのですけれども、一方で、ブランドとしてはそれなりのものとして、ある意味ちょっと特殊なブランドとして出来上がってきているかなという感じがしています。ブランドの作り方というのは、ウケがいいほうに流れればいいのかというところもなくて、ウケが悪くなくてもあえて踏ん張ってやっている、というところが一つのブランドになっているところがあると思うのです。

大学も、少しこじつけっばいですが、そういうところがあると思っています。ニーズに合わせてどんどん迎合していけばもちろん広がるし、メディアの露出も多くなると思いますが、それだとたぶん駄目だと思うんですよ。バランスが非常に難しいんだろうなと思います。どこまでニーズに寄っていったら、どこまで研究に則してやっていくかという。その辺りのバランスをコーディネートするのが、たぶん科としての役割なのかなと思います。

非常にニッチな研究をしている人が、ニッチな成果を上げて、ニッチな市民が関心を持つ、というのは、それはそれで一つサイクルとなっていて、逆にそのようなものがないとやはり大学ではないと思います。ただ、そのような個人が集まって。全体のブランドとしてどうやっていくか、たぶんこれから考えるべきことでしょう。そのような面を意識されつつ、取り組みを進められるのがいいんじゃないかと思います。

【**進行**】 ありがとうございます。現状についてはいかがでしょうか。ご覧いただいたような範囲の中でなんですが。

【国末】 これだけいっぱい取り組みを進めておられることには驚きました。そういう意味では、成果を出す素地はあるのだらうと思います。問題は、ある意味でその見せ方だと思います。そこが難しいところで、どうしたらいいか実は私にも分からないのですが。単に見せればいいということでもないですから、まずまとめるというところから始めて、カテゴリーに分類して、選択と集中を進めるのもある程度必要でしょう。あまりやり過ぎると逆に問題ですが。ブロックで分けて、ブロックごとにどういう性格があって、どういうところを選択して表に出していくのか、どういうところを選択せずにやっていくのか。そのように整理するところから始めるべきなのかなと思います。

【進行】 どうもありがとうございました。では關様、お願いいたします。

【關】 もう最初に申し上げたんですけれども、純粹に命を懸けて使命感を持ってやるという社会貢献も必要だと思います。それにもう一つ、社会貢献の大事な役割があると思います。

こんなことは文章になっていいのかどうか分かりませんが、人文系の学問を守るという機能があると思います。文学部として積極的に社会貢献を出しておけば、その裏で地道な学問として人文科学を守ることができる。ただそれも必要だという程度ですが。だから、その意味で、社会貢献をすべて均等に見せる必要はなくて、ここぞというところを選んで集中して投資していくことも重要だと思います。

今日見せていただいたこの十幾つの分野は、いずれも見せるものには値するものだと私は思います。ですので、これをぜひ育てていくことが必要だと思います。とくに何と言っても、阪大にとっては懷徳堂が重要ですよ。これはもうブランド中のブランドなわけです。このブランドは考えてみると歴史でもあるわけですよ。つまり、鷺田先生がやっていた臨床哲学や「記憶の劇場」もそうですが、いいプロジェクトがあっても、それが長く続いていかないとブランドにならないんですよ。となると、ある一世代の先生が辞めてこのプロジェクトおしまいですなら、いつまでたってもブランドになりません。その意味で、研究と社会貢献というのは表裏一体ですから、社会貢献も支えていくようなシステムをぜひつくっていただきたいと思います。それを表に出し、人文学全体を守るというか、存続していくようにしていく方向が必要です。

もう一つは、先ほど高齢者を対象にすることが多いという話が出ましたけれども、私は、全然問題ないと思っています。というのも、これから高齢者の社会になっていくのだから、高齢者に対しての社会貢献というのはいいことだと思います。そこにもマーケットが存在するという意味においてもですね。ですから、若い人でなくてもいいと思っています。とくに大学の場合は、もともと若い人を学生として扱っているわけですから余計そう思います。先ほど少し言いましたけれども、大学の一つ前の高校まで射程に入れているというのは、これはもう満点に近いのではないかと思います。だから、高齢者

も大事にしながら、なおかつ、さらに大学に入る前の中等教育のところまで目配せしな  
がらの社会貢献をしていくと、大阪大学の強みが出てくるんじゃないかと思います。

【進行】 大変力強いお言葉どうもありがとうございました。最後に研究科長から。

【福永】 きょうは忌憚のないご意見を最初にお願いしたんですけれども、私どもの求  
めていた……まさに私どもの期待に違わぬ、非常に示唆的な、あるいは今後我々が生か  
していくべき重要な指針になるようないろいろなご提言をいただきました。

当然、私どもにとって耳が痛い部分もありましたけれども、やはり評価というのはそ  
ういう部分をきちんと指摘していただくということが本当の姿だと思いますので、それ  
を真摯に受け止めて、研究科の中で、どういうふうに、社会連携、社会貢献に取り組ん  
でいったらいいのか、広報のあり方ということも含めて実質的に議論していきたいと思  
います。

社会貢献、社会連携で外部評価をお願いするのは今回が初めてでした。そういう意味  
で大変重要なご意見をいただいて、私どもにとっていい機会になったと思いますので、  
この先生方のサポートを無にしないような形でこれから取り組んでいくということを約  
束して、お礼の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【進行】 長時間どうもありがとうございました。

(終了)



## あとがき

「外部評価 2018」は、大阪大学大学院文学研究科の第3期中期計画および2018年度の年度計画にしたがって実施したものです。本報告書が無事に発行できますのは、ひとえに、大学の社会的責務と、それをより充実させるための基礎調査としての外部評価の意義について御理解下さり、快く委員をお引き受け下さいました、国末憲人様、關雄二様、武内紀子様の3名の委員の皆様のご協力のお蔭です。

委員の皆様は、新聞メディア、博物館・大学共同利用機関、実業界においてそれぞれ顕著なお仕事をされ、かつ、序文にも記したように、「大学の社会連携・社会貢献」というテーマについて高いご見識を備えた方々でした。大変ご多忙の毎日をご過ごされている皆さまですが、大部の資料にお目通しいただいた上で、年末の慌ただしい時期、本研究科において開催の委員会にご足労いただきました。ここに衷心より御礼申し上げます。

「はじめに」および「序 外部評価 2018（大阪大学大学院文学研究科の社会連携・社会貢献活動）」でも述べられている通り、今回の外部評価は、われわれとしても、これまで取り組んだことのない視点から自身の活動を見直すものでした。大学が社会の求めるところから乖離した象牙の塔であってはならないという反省は、決して最近になって起こってきたものではありませんが、実業界を含む、それら多様な背景をもつ皆さまの声を、直接にうかがうことのできる機会は必ずしも多いものではありません。その意味で、今回の外部評価は大変に意義深いものとなりました。

今後は、本「外部評価 2018」の評価内容について教職員で共有・吟味し、今後の文学部・文学研究科の教育活動の改善につなげていく所存です。

(評価・広報室〔文責 岡田裕成〕)

評価・広報室

室 長：岡田裕成

副 室 長：高橋照彦

研究評価部門：佐藤廉也（チーフ）、村田路人、園府寺司

教育評価部門：飯塚一幸（チーフ）、加藤正治、加藤浩

広報部門：加藤洋介（チーフ）、清水康次、堤一昭、

三宅知宏、古後奈緒子

ネットワーク部門：吉田耕太郎（チーフ）、輪島裕介

\* 室員は2018年度のもの

---

大阪大学大学院文学研究科  
外部評価報告書  
2018

2019年7月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室  
発行 大阪大学大学院文学研究科  
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5  
TEL&FAX 06-6850-5107(評価・広報室)  
<http://www.let.osaka-u.ac.jp>

---



DISSERTATION  
SUR  
LA NOBLESSE  
DE FRANCE.

---

ORIGINE , FONDEMENT  
& *nécessité de la Noblesse.*

**I**L est certain que dans le droit commun tous les hommes sont égaux. La violence a introduit les distinctions de la *Liberté* & de l'*Esclavage*, de la *Noblesse* & de la *Roture*; mais quoique cette origine soit vicieuse, il y a si long-tems que l'usage en est établi dans le monde, qu'elle a aquis la force d'une loi naturelle. A Les